第一言語

臆病なバンドリーマーX

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

オリジナルバンドものです。六話～　にアンケート追加しました

２０２２・０３・０８　非公開を公開設定にしました。更新は基本的にないと思ってください。

「音楽」

が、好きだった。昔からそうだ。どんなに、誰に何を言われようとも。

伸ばした手を自分で掴む。この手は、あの子だ。音楽の子――。自分では叶わないあの子。

掴んでやる。いつか。

そんな夢を抱きながら、二度寝に入る。

「ごはん！」

母が呼んでいる。今日は高校の入学式で、張り切っているのだった。

笑われたりしないかな、大丈夫かな。

パリッとした制服に身を包み、赤いリボンをちょいちょい直してみる。　変に見えないかな？

「ご、は、ん！」

「……今行くぅ！」

うるさい母親だ、なんて笑いつつ、一歩ずつ歩いていく。昨日と何も変わりないけど、何となく気分がいい。

目次

一話 1
二話 9
三話 19
四話 33
五話 38
六話 50
七話 59
八話 68

一話

バサッと。図書館の机に何枚か、プリントが置かれる。授業の課題みたいだ。

生物、化学。あと現代数学。

「何、これ」

「何って、課題だよ？　チヤ、理系得意でしょ」

「じゃ、これ。……こっちも」

「まっかせなさーい！」

図書室ではお喋りは厳禁……って訳じゃないけど、声を抑えるくらいのことは知っている様子で、腕まくりをして、そうして珠のような肌に力こぶを作ってみせる。

国語Ⅱと世界史。

身軽になった私はさっそく得意教科に取り掛かる。と、言っても用語も覚えているし解法もすぐにわかる。頭の中がそのまま印刷されればいいのに、と思った。

「ねぇ、今日暇？」

「……勉強中だけど」

「今じゃなくてこの後。どうせすぐ終わるっしょ？」

「どうかな」

「もし、早く終わるとして。

――で、どうする？」

「部活、行きたくない」

フッ、と笑う気配がした。

「アタシもそれ考えてた」

私も負けずにフフフと笑う。二人でフフフフとした。

部活、いきたくない。我ながらとっても恥ずかしがり屋なセリフで、余計に恥ずかしい。遠回しなようで私たちの間ではそうではないからだ。

でも、その恥ずかしさは意味がなかった。

だって、もし早く終わるとして、なんて、そんなことはない。

私はずっとこうして、図書室の席に腰を掛けている。
ずっと。
「あ、そこ名前間違えてる」
と、そうだった。私のプリントじゃなかった。
「そっちこそね」
見比べて、笑い合う。二人消しゴムで自分の名前を消した。
私の名前は、妹尾　茶屋町（セノオ　チャヤマチ）。彼女の名前は、大宮　朱火（アケビ）。私たちはそれぞれの名前の欄に、逆の名前を書く。

朝は基本的に早く起きる。それこそ6時くらいに。軽く顔を洗って、寝癖を直し（いつも面倒になって途中でやめる）、朝食をもそもそとして、ふと時計を見ると7時とかそれくらい。部活の朝練はもう30分も前に始まっているし、登校にしては早すぎる。
私が所属する吹奏楽部では毎朝に練習時間があって、合奏とかは朝練ではやらないが、パート練自体は当然としてある。
部屋の中央にあるローテーブルを見た。昨日と変わらない定位置においてある黒い楽器ケースに入っているのはフルート。吹奏楽部と言えば、ではなくもない。人気が高く、人数の多い楽器だ。当然、パート練で見る顔も多い。
苦手だった。放課後の合奏も。だから、一年間だけ我慢して、其れ以来部活には顔を出していない。
つまるところは。そのころからの癖で早起きをしてしまうということだった。健康的だし、目覚まし時計の時間を変えるのも億劫で。
私は自転車に乗って家を出た。
両親は共働きで既に出ている。鍵はカードキーのオートロックと回すタイプの鍵の二つ。しまった（家の扉もしまったし、鍵もポケットにちゃんとしまった）ことを確認し、歩き出す。ウサギと星のキーホルダーはアケビがお揃いで買ってくれた。小学校の修学旅行で、お

土産屋で一番に選んだ。ご当地限定品とかは買わなかったみたいで、なんでだろうか？

一車線に、路側帯だけの道路に縁石はなく、車がいない時は道の真ん中を自転車が通る。当然私も通る。アケビは自転車を持っていないので、この先一生自力で歩道から出ることはない。フフフと笑った。でも、二人乗りには丁度いい言い訳だ。

歩道の更に脇には所狭しとばかりに家やらアパートやらが立っている。庭の木か街路樹か、緑のモジャモジャした葉っぱがよく見える。明るいと言えば明るいけど薄暗いと言えばそんな気もする時間、草木も寝起きらしく、葉がさざめく音もどこか重い。

勿論、そんな時間から学校には向かわない。

ウチは住宅地の中にある。そこそこ大きな住宅街で、学校・駅・繁華街などに近いので、若者や子供も多く閑静とはいいがたい。そのおかげで同年代や同級生は団地の中でかなり多いが、正直アケビ以外覚えていない。話すこともないので、向こうからもそんなもんだと思う。

５０メートルほど走らせて右に曲がる。

そうしたら公園にでる。タコの形の滑り台と、いまだに苦手な鉄棒、そしていつも山にトンネルのある砂場だけの小さな公園。一応、ベンチは二つ。あとは自販機。生茶がうまい。

公園には大きな桜の木が植えてあり、春にはそれはもう立派な姿になる。満開の桜と舞い散る花びらを空中でつかもうとぴょんぴょんする子供たちはこの住宅地における春の風物詩と言える。当然花見に集まる人も多い。ウチも毎年ここだ。私と、アケビと、父と、母、後アケビのママ。

公園のそばに立つアパート群は中々広い。大きな敷地にアパートが四棟入っている。部屋は家族向けに大きめで２Ｋ～３ＬＤＫ。大家さんは知り合い。空き部屋は２０くらい。いい物件のわりにお安い値段。ただ、駐車場が狭いためとても割高だ。

と、ブレーキ。

三階、一番端の部屋を見る。

……。

電気がついていないのを確認し、私は駐輪場の、いつもの定位置に自転車を止める。水色のママチャリを残して、横長のアパートを二等分する、段の低い階段を上っていく。途中、何人かすれ違ったり声をかけられたりして、愛想笑いで会釈したりなんかする。

３０１号。

大宮　と、表札がかけられていた。

ピンポンは押す意味がない。

「お邪魔します」

固鍵を使って侵入する。

綺麗な玄関。

２ＬＤＫだ。結構広い。

廊下を抜け、目的の部屋へ向かう。

いつも通りの朝が過ぎると、いつも通り学校に行き、授業も終わり、放課後。

荷物（教科書）をカバンに詰め終わったアタシは、静かに席を立った。喧噪も、人（ひと）気も多く残る教室で、周りのヤツらなんかは、この後部活だとかなんだとか、どうでもいいことをだらだらとしゃべっている。

苛立ち気味に、強く扉を開けた。

床を鳴らして歩く。担ぐように持った鞄は軽いようで重い。女生徒らしくしとやかに持つ、というわけにいかない。アタシの性（しょう）には合わん。まあ、どうせ携帯ゲーム機と漫画くらいしか入っていない。多少雑に扱っても構わん。

階段を降りながら財布の中身を思い出す。確か、今月残りの日のことを考えても、２，３０００円は余裕があるはず。クーポン券とかも何枚か心当たりがある。適当に、駅前でフラフラするくらいの余裕はあるか。

今日はどこに行こうか、夢想する。ゲーセンでもいいし、海に行ってみてもいいと思う。無難にカラオケでもいいし。動物園、水族館とかでもいいかも。

どうしよっかな。

ま、とりあえず。

どうでもいいやと投げ出す。

どこに行くかは、アタシの足に任せよう。いつも通り、行きたい場所に勝手に運んでくれる。

一回の廊下を抜け、正面玄関へ。オキニのスニーカーが鳴らす床の音は意外と大きくて、でもそれが何となくやめられない。周囲の音がすべてなくなるわけではないけど、ある程度消してくれる。

音の原因になっているスニーカーを見る。規則正しく、ハイセンスに打たれた鋲。夜空色の、星々がきらめくチョーオシャレな靴。去年、運命の出会いを果たしてから、毎日履いてる。

……かわいい。キラキラした、雄大な星のキュートさで少し気持ちが和らぐ。常にあるイライラが和らいでいく気がした。

どこからともなく湧いてくる、イライラが徐々にやすらいで――。

ピチャ。

「あ……」

「……」

ニコイチ

の

片割れ。

「……たしかに、アタシこんなカッコだけどさ。なにもクラスメイトから突然水鉄砲で撃たれる筋合いはないはずなんだけどな」

「……ごめんなさい」

ようやく口が動いた様子の、腰まである黒髪が特徴的な女生徒（妹尾）はそう、小さな声で呟いた。……相変わらず声が小せぇ。

と、そこにもう一人（大宮）も後からかけてくる。

「やー、ごめんごめん、もしかして、引っ掛けられちゃった？」

そんな犬の便所みたいに。

「や。まー、そこまででもねぇ。いいよ」
イラッと湧き上がるけれども、私はそれを堪えて冷静に話す。水はおそらく水道水だ。セーラー服が濡れたくらいどおってことない。
さすがに、これがカバンならマジでキレていたけれども。
「ほんと？　大丈夫？　けっこーもろにかかってなかった？」
「大したメイクもしてねぇし大丈夫だよ。んな事より早く帰りてぇ」
寄り道はなしだな……
考えつつ、ショートカット（大宮）の隣で頭を下げる妹尾に声を掛けて頭を上げさせる。
むかっ腹が立って仕方がないが、こうも謝られたら許してやらない訳には行かない。アタシもずいぶん丸くなったな、と一つ自重して、帰り道へ振り返ろうとする。
「ま、待って待って。ほら、顔とかさ、大丈夫？　冷たかったでしょ。氷水だったから……」
いいつつ、帰路をたどり始めた私の目の前に回り込んでくる（勿論、大宮）。確かに、顔にも水が飛んだが、そこまで過剰に心配するほどか？
いや、一般的な女子高生だとメイクとかを気にして心配するのかもしれない。アタシは、そんなにメイクというメイクはせず、ちょっとのせる程度なのでそこまで問題は無いし、最悪メイクが崩れたところで、家に帰るまでだ。どうだっていい。
そう言おうとしたが、大宮は既にスカートのポッケからハンカチを取り出している。いや、なんでだ。それを拭くのは分かるが、せめてこちらに渡して欲しく――、
「ごめんね、つい夢中になっちゃって……」
「――っ、触んな！」
パチッとその手を叩いて弾いた。
――。
いくら女同士とはいえ、顔を触るのはさすがに無理。
「あ、ごめん。これ、使う？」

「……ありがと」
ハンカチを受け取る。
水気を拭き取りつつ、目の前でふにぇらと笑う女（大宮）を睨み続ける。肩口で切りそろえたショートカットに長いもみあげの似合う女は、そんな私の視線に晒されつつもなおも笑顔を崩さない。
……何だ、こいつ。
変なやつだ。こいつら二人とも。
妹尾は大宮の少し後ろに立ってこちらを怪訝な目で見つめている。こいつも変だ。最初にごめんと謝られた以降は何も喋っていない。当事者はコイツのはずなんだけどな。
そんな私の視線など素知らぬ顔で、黒髪ロング（小さな三つ編みを二つ作って、首の後ろの方で纏めている、どっかのお嬢みたいなヘアースタイル）は何も変わらず、こちらを心配するように視線をやっている。細身のヘッドホンを被って、まるで「どうしたの？」とでも言いそうな、とぼけた顔。殴ってやりたい。
普段の学校生活でも、コイツは余り喋らない。喋るのは、もっぱら隣にいるショートカットの背の高い女（１６０のあたしより高い）。
てめーは自分で喋れねーのかっ……!!
クソっ、腹が立つ。
みんなだ。あたし以外の全部があたしの障害になっている。イライラさせてくれる。
大きく舌打ちを一つして、二人の肩を片手ずつ掴んで、扉を開けるように退かす。鞄を担ぎ直し、大袈裟な靴音を立てながら岐路につく。
イライラする。

「ねぇ～」
「……」
「ねぇ～～」

「……」
「ねぇ～～～～～～～～」
暇だった。
「……何？」
「暇。なにかすることない？」
。
アケビの家。つまりは、朝にも行ったあのマンション。学校が終わって、図書館で課題を済ませた私達は、部活には行かずにそのままに真っ直ぐ帰宅したのだった。制服を着替えもせず、居間の畳に転がっている。シワがつくから、嫌だけど。アケビも寝てるし、共犯だからオッケーだ。
「楽器、取ってこようか」
「その間私は暇なの～！」
知らない。
「……」
「うぇっ、いや～なんか、暇になったな～と思ってさ。ほら、去年は今頃お互い部活だったじゃん」
アケビは元演劇部。私と同じタイミングで同じように幽霊部員になったけど。本人は、特に気にしていない。もともと、そこまで本気でやってるというわけでもなさそうだった。結局、私と一緒に部活をやめた。
「にゃ～ん」
「……？？？？」
ゴロゴロ床を転がっていた

二話

あの有名なＲｏｓｅｌｉａの耳にもラッパの音が響いていたらしい、というのは、私にとってかなり凄いことだった。活動の拠点としているライブハウスだって違うし、一～二駅は離れていて、しかも世情に疎い私が、それでも噂をよく耳にするバンドがＲｏｓｅｌｉａだからだ。そのＲｏｓｅｌｉａのドラマー、大魔姫はテンションが上がった様子で、マイクを手に持って記者のように質問をされるのは桜だけど、正直照れる。

「多分、そのラッパパッパであってるよ」

「へー……あの……凄い!!　ちょーちょーちょーかっこいい!!」

「そ、そうかな……」

おだらてられ、ポリポリと頭の、サイドテールの辺りを掻く、漫画みたいなリアクションで照れる桜。かく言う私も、座ったまま照れたように視線を外し、中空を眺める。リンリン――さんだけが、呆然と、よく分からないような顔をしていた。

「あこちゃん……ごめん、《ラッパパッパ》って……？」

「あー、説明してなかったもんね。

ほら、この前のＲｏｓｅｌｉａの練習で、新しい練習曲にってあこがみんなに音楽聞かせてあげたことがあったでしょ？」

「うん……。とっても綺麗だった」

「あれがラッパパッパの演奏だよ。

――あのっ！　あこ、初めてラッパパッパを聞いた時、感動して涙が出ちゃって！　さ、サイン下さい!!」

「サイン……？」

大魔姫は机に両手をついて、興奮した様子で前のめりになってサインを求めていた。流石の桜もこれにはタジタジだ。私たちラッパパッパはプロのお誘いこそあるけれども、サインを作った覚えはないし、ましてやもとめられたことすらない。つまり、桜がここで頷けば、サイン第一号は大魔姫になる訳だ。

「ん、まあ……いいよ？　その代わり、Ｒｏｓｅｌｉａのサインと

交換ね。全員分を、色紙二枚だよ」
「やったあ！　それくらいおやすい御用だよ！　なら、そっちも五人分の色紙をあことりんりんの分ね！」
「いいよ！　次に遊ぶ時に交換しよっか。あ、連絡先知らないや。聞いていい？　メッセージアプリでグループ作ろー！」
「……あの、たまに、四人で遊んだりとか……して、みたいです」
と、そんな運びになった。サイン色紙なんて今は持っていないし、他のメンバーもいないから後日向こうのサインと交換するらしい。ただ、私はＲｏｓｅｌｉａの音を聞いたことがないし、向こうも私たちを見たことがないのにサインが欲しいのだろうか。
ともかく、私のメッセージアプリに二人の名前が入ってくる。《リンリン》と《あこ》。こっちは大魔姫じゃないらしい。グループにも誘われる。《ＮＦＯ好きの会》という名前らしい。もともと、そういう集まりだと思い出した
「じゃ！　連絡先交換も終わったところで、歌いましょうか！　カラオケだしね」

その日はライブの日だった。なんだか丸っこいような名前のライブハウスで、ライブだ。ただ、その日はいつものライブとは違う、ツーマンライブ。正しくはツーウーマンライブ。お相手は勿論Ｒｏｓｅｌｉａだった。アレから、あこや燐子と連絡を取り合い、Ｒｏｓｅｌｉａの全員をメッセージアプリ上でだけど知ることが出来た。サインについては、あこが大層怒られたらしい。
Ｒｏｓｅｌｉａは５人編成のガールズバンドだ。ドラムの宇田川あこ、ベース今井リサ、キーボード白金燐子、ギター氷川紗夜、そしてボーカルの湊友希那。なんと、ギターの氷川紗夜は今をときめくアイドルバンド、バステルパレットのギター担当氷川陽菜の姉らしい。私としてはそれよりも、Ｒｏｓｅｌｉａの中でも一際名前の大きな湊友希那が気になる。噂によれば、プロの誘いを断ったとか言うけど。

「ライブ前って皆さんいつもこんなに静かなんですか？」
「んー？　ま、大体ね～☆練習量から言えば緊張する事じゃないんだろうけど、でも、ほら、やっぱりなんか違うじゃん？　普段の練習では私たちいがいに音を聞いてる人は居ないんだし♪」
「そんなもんですかね～」
　楽屋にはウチのリーダーの桜とＲｏｓｅｌｉａベースの今井リサの声が響いている。あとはＢＧＭになる、厳かな低音くらい。Ｒｏｓｅｌｉａは、リーダーは湊友希那なのに何故か今井リサが顔役をやっている。まあ、湊友希那は見るからに人付き合いが苦手そうだ。今はだいぶマシになったけど、氷時代と噂される時期にはハリネズミのようなものだったらしいし。対して今井リサはかなり人付き合いが上手い。ギャルのような格好をして、その癖言動は潤滑油そのもの。縁の下の力持ちと言うやつだろう。永遠に接点がなさそうなＲｏｓｅｌｉａを回しているのは彼女なのかもしれない。
「リサ、そんなんじゃ――」
「はーいはい分かってるって～。練習は本番通り、本番は練習通り、でしょっ♪」
「分かってるならいいわ」
「リサ姉その言葉、カッコイイ!!　練習は本番通り、本番は練習通り……うん、あこ、緊張溶けてきた！」
「そうなの？　いや～、困っちゃうな～☆話すこと全部名言になっちゃうな～☆」
「でもそれ……小学校とか中学校で、よく聞きませんでした……？」
「あ、あれ～、そうだっけ。よく思い出せないな～？」
「リサ姉……」
　とまあ、こんな感じで、上手くメンバーを纏めている。といっても、本人が一番の緊張屋らしいが。因みに、湊友希那と今井リサは幼馴染みだそうだ。湊友希那は音楽にしか興味ないと公言するほどの人なのに、どう間違えたら隣の家からギャルが生まれるんだろうかと、少し気になった。

「よし」
　ガタッと立ち上がったリサは、己の頬をパチリ、叩いて、席に座った友希那の隣まで歩いてゆく。なんとなく、雰囲気が変わったのを感じる。「友希那、トイレ行っとかない？」と聞くリサ。集中していた友希那はそれに気付かず、二回目に言われてようやく気付いて、少し考えたあと、「ええ」と一言だけ発する。そのまま席を立って二人で楽屋を出ていった。
「本人が相当緊張してるんだね」
「ええっ、友希那さんが!?」
「ううん、今井さんの方」
「もっと有り得ないですよ！　リサ姉、緊張とかしませんし、今日も合同ライブってことでテンション上がってるくらいで――」
「ま、近い位置だと分かんないよね」
　星は近いとその等級に気付けない。当たり前には感謝できない。《そういうもの》だと受け入れた世界に、感謝などないから。だからこそ、手放す物には過敏なわけだけれども。
「……今井さんがいないと一気に静かになるんだね」
「リサ姉はムードメーカーですからね。特にライブ前は……。いっつもこんな感じなんです」
　つまり、リサはお話をして、燐子はイメージトレーニング、紗夜はイヤホンをして苦手なフレーズを繰り返す。ライブ前ってこんな感じで音楽に集中するんだ、と感心する。私と桜は話をしてばっかりだ。他のメンバーは、練習をしていたりゲームをしていたりする。
「ラッパッパの方はどうなんですか～？」
「こっちもいつも通りだよ。アタシとイトがずっと話してる。トモはずっと練習してて、マナとアスカはゲームしてんだ」
「それでライブできるの凄いですよね……」
「さすがにチューニングくらいするけど」
　桜、それは大前提だと思うけど。私は隣をちらりを見た。メイクがなくても恐ろしい程に整った桜の顔とぶつかる。どうやら彼女も私のツッコミに気づいて隣を向いたらしく、口角をふわり釣りあげてフ

フっとわらう。「そりゃそうだ」と声を上げて再び笑った。私も笑う。
「そろそろ、出番ですね」
あこが静かに言う。時計を見れば、本当だ、そろそろＲｏｓｅｌｉａの出番だ。私たちはその後。Ｒｏｓｅｌｉａの次になる。

心地よい重低音が聞こえる。
トモの音だ。ボー、ボー、と安心する音を奏でている。タイミングを見て、マナがゲームをやめて舞台へと上がって行った。一定のリズムの中、迷いなくなく歩いていく。そして、自分の椅子に座り、楽器の準備を始めた。吹き口と組み立て部を軽く拭き、口元も拭い、静かに楽器を構える。楽譜を取り出して、開く。
演奏が始まる。二人は掛け合うようにメロディーを奏でていく。低音の二人では曲を演奏できないが、リズムがあればそこに曲は生まれる。観客の中で、今、おもいおもいに曲の推測が成り立っているはずだ。
アスカが舞台へ上がった。同じようにして歩いてゆき、椅子に座る。音に厚みが生まれた。いや、生まれたじゃなく、音の厚みに気付いたのだ。観客が一瞬で魅了の深みにハマった。その、唾を嚥下する音でさえ私は聞き取れる。こういう時に人は大抵、息か唾を飲むものだった。
最後、私と桜が同時に舞台へと上がった。私が右手側、桜が左側。同じ歩幅、同じ足音のリズムで。桜の足音は好きだ。だからこそ、私は彼女に合わせられる。リズムが同じだからって、同じ足音って訳じゃないけど。それでも私は、桜と同じ歩幅で歩きたい。隣について行きたい。
椅子に座る。同じようにして、楽器を構えて、楽譜を開いた。

「いや～、凄かったわ～☆お客さんもみんな聞き入っちゃってたよ」
「そうね。Ｒｏｓｅｌｉａの世界観とも上手く共存できていたし、文

句なしね。次は、そっちのライブに出たいくらい」
「それはいいですね。私も、特にお二人の表現力に――感服致しました。これを機に、Ｒｏｓｅｌｉａとラッパッパでお互い高めあえる関係になれば良いと思います」
「また一緒にやろーね、ラッパッパ！　次は対バンで！」
などと、私はカルピスウォーターを飲み飲み聞いていた。Ｒｏｓｅｌｉａがライブの反省会によく利用するファミリーレストランでのこと。確かに私も今回はなかなかいいパフォーマンスができたと思ったところ。見れば、桜も同じような感想のようで、得意気な顔をしていた。因みに、その他メンバーは自主練だと言ってさっさと帰ってしまった。
「プロの打診、なんていう噂も……納得です……」
「あ、それ聞きたかったやつ!!　ねね、実際どうなの？」
「あ～はは。気になるよね～……やっぱ。
――うん、メジャーデビューの話は来たことあるよ。ウチでどうか――って」
今日もＲｏｓｅｌｉａの反省会が終わったところ。料理も五割方食べ終わって、後は女子会を思う存分楽しむ――と、そんな訳にもいかずに、ラッパッパのリーダー、桜は質問攻めにあっていた。
「うっひゃー、そりゃ凄いよ。あの演奏も納得だね～☆」
「ええ、それ程に素晴らしい演奏でしたから」
「あこたちも、いつかお誘いがバンバンきちゃうようなバンドに……」
今井リサは机に肘をついて、ポテトをフリフリ言う。
氷川紗夜はポテトの皿を、若干自分よりに引き寄せつつ、一気に三本もつまんでいる。
宇田川あこは手に持ったスプーンの柄を握りしめ、机の上でガッツポーズをするように勇ましい表情で決意する。
湊友希那は、なんだか複雑そうな顔で、感想を聞いて、ドリンクバーを追加デ注ぎに行った。
「……」

そんな、おもいおもいの感想をただ口にする中、Ｒｏｓｅｌｉａメンバーの一人、白金燐子だけが黙々とメニューを、パスタの皿をパクついていたのが気にかかった。見れば、そんなに美味しいそうな表情でも、お腹が減ったような表情でもない。暫く眺めていると、私の目線に気づいたのか上げた顔を再びうつむける。なにか悩んでいることがあったのか、首をぷるぷると振り、決心したような表情で発言する。

「あのっ。デビューをどう考えてらっしゃるのか……聞いてもいいですか……!?」

「……うん、いいよ？」

誰にでも分かるような深刻な表情で、白金燐子は言った。ドリンクを飲み干し自分のコップを空にして、ファミリーレストランには似合わぬ緊張感を漂わせつつ。思わず、リサが「アタシ飲み物持ってくるわー☆」とコップを数個持って逃げ出すくらい真剣だった。Ｒｏｓｅｌｉａ（彼女たち）の名前の大きさから考えて、プロの誘いくらい来たことがあるだろう。それで、だろうか。

なんにせよ、不敵な笑みを浮かべる桜の答えは決まっている。

「――って言ってみても、まだよく分かんないんだけどね。保留だよ」

「プロになるつもりは無い、という……ことでしょうか……？」

と、白金燐子はまたしても深く突っ込んでくる。何が彼女を突き動かすのか知らないけど、こういったことに首を突っ込みたがる人は嫌いだ。私達のことは、私たちの間で完結させたい。まあ、桜はこういうことに関して他人を容認するタイプだから、私もそうする。気分はあまり良くないけど。

「そんなんじゃないよ？　全然。アタシたちの音が、そのままお仕事になるなら……ううん、仕事で音出せるって最高だよ」

「――なら、なればいいじゃないですか、プロに。ラッパッパなら、簡単ですよね」

「ちょっとりんりん、そんな言い方ないよ」

白金燐子のちょっと――いや、明らかに挑発している言葉を聞いて、最初に口を開いたのは宇田川あこだった。燐子とあこ、この二人

はお互いの暴走を止める制御装置になっている。普段から暴走しがちなあこを窘めるのは燐子、頻度は高くないがその代わり方向と度合いが見当違いな燐子の爆発を止めるあこ。面白い関係だと思う。私はまだ彼女たちと知り合ってばかりだが、それくらいのことがよみとれる程度の仲ではあるように自負していた。

「あこたち、初めて一緒にライブしたんだよ!?　まだ、そんなにお互いのこと知らない」

白金燐子が、はっとした顔になる。何かに気付いたらしかった。黒髪がゆらゆらと揺れる。その眼を、あこが覗き込む。紫がかった、縦巻きの髪を同じリズムで揺らして。

数秒、見詰めあっていた。あこは何も表情を変えず、白金燐子は、口元だけをもにょもにょとうごかしていた。それが何を意味していたのかは分からない。Ｒｏｓｅｌｉａの間でどんなことがあったのか、私は知らない。分かるのは、白金燐子はプロという言葉にトラウマみたいなものがあって、今の数秒で何か複雑な気持ちが幾つ巴かでせめぎ合っていたという事だけ。

「……ごめんなさい、私、過去のことで少し……。その、カットなっちゃって」

「頭、冷やしてきます……」

ゆらりと立ち上がる白金燐子は女子高生なのに幽鬼かと思うオーラを放っていた。これが、彼女本来のネガティブオーラなんだろう。そしてそれを癒すのが、宇田川さんという訳だ。

「……」

桜は何も言わない。目にかからない程度に流される前髪も、揺れ動くサイドテールも、瞳の輝きにも一切変化はない。そういう人だからだ。最近知り合ったばかりの人には特にそういう態度をとる。私が他人と込み入った話をするのを嫌う理由の一つだ。こうなった桜は何より怖い。本人にそのつもりは無いし、実際桜はこれっぽっちも怒っていないけれど。私には一回も取ったことがないこの姿勢が、私に向けられたら……それを嫌でも想像してしまう。ぜったいに楽器を持たせたくない状況。

「あ、あこも！」

続くようにして、あこも店の外へと出ていった。残ったのは、お通夜のような空気だけ。

「――おっ待たせー☆あれ、なーんか、下げてるかんじ～？

あこ、とりんこ……がいないか。ま、それは一旦忘れてさ。自己紹介でもやらない？　確か、あことりんことはもうやったんだよね？

じゃあ、アタシから――☆」

それと、タイミングを見計らうように戻ってきたＲｏｓｅｌｉａの緩衝材だけだった。

子供の頃から、自分の世界というものは明確にあった。ひょっとしたらその場所でしか生きてこなかったかもしれない。兎に角、幼稚園で鈴を鳴らしたあの日から、自我というものが見え始めたと思う。鈴の鳴らしかた一つで周りの声が幾つにも変わる。何より、明確に色を変えるその音に魅了されたのだった。

自分自身、音楽が好きだったから、その分野で世界でひとつだけとも言えなくなくなもない（はずの）才能があることは誇らしく思う。そのせいで、大きく人生が狂ったとしても。

幼稚園の頃はまだ良かった。楽器を鳴らして、周りが凄い！　と言って、それで終わりだからだ。自分もその時は周りの反応を嬉しく思っていた。思えば、あの時から既に遠巻きに見ていた人たちはいたのだ。多少なりとも音楽的教養があり、自分のの音楽に《異質さ》を認めた人たち。そんなこと気にもせず、元気な子供はもっと褒めて欲しくて、楽器の練習を続けていたが。

小学校時代で事件は起こる。――「なんか、気持ち悪い」。初めて言われた言葉だった。自分の音楽は二つとないものだ。特別だから、みんな褒めてくれると思っていたのに。ああ、その時の少年は、ただ自分の音楽の《異質さ》とは違う場所に生きていただけだったろう。しかし、その時の自分はかなりショックを受けて、泣いてしまったのだ。

小学校時代でのこと、喧嘩なんて泣いたもん勝ちだ。喧嘩ですらなかったが、その男子は徹底的に責められ、自分も、口出しはすれども接することは無かった。その時は、戸惑っていたんだと思う。自分の音楽が受け入れられないことなんて初めてだったから。マイナスの評価は初めてだったから。そうして音楽を初めて拒絶され、ようやく遠巻きに眺める人たちに気づく。ずっとそこにいたの、そこで何をしてたの、自分は頑張ってたのに。頑張れば頑張るほど、《異質さ》を磨けば磨くほどに自分との距離を開けてゆくその人間たちが許せなかった。他の人たちは手放しで褒めるのに。あいつらは、どこか観察するような目で見て、自分と距離をとる。当時の自分からすれば意味不明で、大声で癇癪を起こしたこともあった。

こと《音楽》という分野に関して、頑張っても認められないという事実が受け入れられかった。自分の大好きなものが、他の人からすればどうでもいいのか。

グルグル、頭が回って腹が減って、よく分からないまま泣いた。

なんで、なんで、なんで。

頑張ってるのに。練習、してるのに。

なんで遠ざかるの。音楽、嫌いじゃないんでしょ。

気持ち悪いってなに、分からないよ。

どういうこと。

なんで……。

――自分が一番好きなものが嫌いなの。

三話

「戸山香澄！　ギターボーカルやってます！　キラキラドキドキしたいです！」

――と、お互いの自己紹介が終わる。ファミレスで七人、桜、私と、ポピパだった。昼ごはん代わりに注文をして自己紹介を終えたところ。料理が順々に届いているけど、誰も手をつけていない。ポピパはみんな一緒に食べるんだろうか？

「アタシたちもボーカルだ！　ボーカルどうし、仲良くしようね」

「はい！　あ、そうだ。実はガルパでボーカルのグループがあるんですけど、入ってくださいよ！」

「勿論！」

で。なんでこんなことになっているかと言うと、Ｒｏｓｅｌｉａに《ガールズバンドパーティ》に誘われたからだ。サークル、というライブハウスでのガールズバンド・ライブイベント。五バンド合同でやっていたそれに、ラッパッパも参戦するわけだ。Ａｆｔｅｒｇｌｏｗ（アフターグロー）、ｐｏｐｐｉｎ'（ポピン）Ｐａｒｔｙ（パーティ）、Ｐａｓｔｅｌ?Ｐａｌｅｔｔｅ《パスパレ》、ハロー！　ハッピーワールド！（ハロハピ）。そして、私たち。計六バンド合同の一大イベントだ。

「他のラッパッパのみんな……皆さんは？」

「あはは、敬語じゃなくていいよ、バンド仲間なんだし。他のみんなは用事があるってさ～。全員の顔合わせの時は集まれるから、今日はとりあえずアタシ達が代表ってことで」

「そうですね！」

元気いっぱいの戸山香澄だった。

ポピパメンバーは全員が花咲川の二年生だ。私たちは高石高校三年、年上ということで気を使っている……のだろうか？　何も分からない。

まあ、人数分の自己紹介は聞けたし、緊張云々はどうでもいい。今日は、参加することに決めたガールズバンドパーティについて聞きに来たんだ。Ｒｏｓｅｌｉａは、ポピパがガールズバンドパーティを始

めたと言っていたから。いや、メンバー集めをやってたんだったか。
「それで今日は……」
「ガールズバンドパーティ、だよね！　もちろん、大歓迎です！」
「あー、ちょっと、戸山さん？　少しの間、静かにしていただけます？」
　元気いっぱいに答える戸山香澄を市ヶ谷有咲（キーボード）が宥める。ほかのメンバーもそうだが、中学からの女子校育ちだけあってみんなお行儀が宜しいし、言葉遣いも女性的過ぎるくらいだ。きっと、放課後マックで、ストロー入れをクシャクシャにしたものにコーラをかけて芋虫遊びをした経験すらないんだろう。
「えーっと、私が説明しますね。参加については大歓迎です。まだ細かいことが決まってないのですが、セトリとか早めに決めておいて貰えるとスムーズかと思います。参加バンドは一応、いつも通りアフターグロウ、Ｒｏｓｅｌｉａ、ハロー！　ハッピーワールド、ｐａｓｔｅｌ？Ｐａｌｅｔｔｅ、私たちｐｏｐｐｉｎ′　ｐａｒｔｙですね、今の所」
「あ、そうそう。それで、セトリの事なんだけどさ――」
「どうしました？」
　桜が口を開く。
　有咲は丁寧に説明していたが、既にＲｏｓｅｌｉａから聞いていた話の通りだし、まだ何も決まって無さすぎる。そこら辺は決定後に聞けばいいと思ったんだろう。もしくは、私たちも演者として会議のようなものに出席するのかもしれない。
「Ｒｏｓｅｌｉａから聞いた限りだと、ガルパのコンセプトは名前の通り《パーティ》。歌う曲も当然それをイメージしたものになるって言ってたんだけど」
「そうですね。香澄……戸山さんが言い出した言葉ですが、今ではみんながそれぞれパーティって言葉を意識して曲を持ってくるので、自然と」
「アタシたちの曲にパーティっぽいのないんだよね。どれも神妙な感じでさ。恋愛話とか、サイコ・シリアスだったり、賛美歌っぽかったりするから……」

桜は言いつつ、チラリとこちらを見る。ラッパッパの曲はどれも私が担当しているからだ。歌詞は私と桜のボーカル組が歌う度に別の意味を込めることが多い。音を使ったボーカルでは、こういった利点がある。が、解釈をほっぽり出しているのでどうしても曲調が他人に伝染してしまうのだ。私と桜の歌う曲が、客にとって同じ解釈をしていない。だからこそ、私と桜は客や友人から曲のイメージを聞いて、ライブハウス事にそれを使い分ける必要があった。

と言っても、そう何曲もない。即興で語るオトを曲として日記的に纏めだしたのは最近だ。手持ちの自作楽譜は五枚だ。

「別に、パーティって名前だからってパーティっぽくする必要ないんですよ？　さっきも言った通り、みんなが勝手に曲のイメージを擦り寄せてるだけなので――」

「ううん、なら、尚更それを守るべきだと思うよ。だからね、アタシたちは、新曲だけで勝負するつもり。持ち時間にもよるけど、そう多くは作れないよ」

「ラッパッパ側がそういう考えなら止めませんけど、どうしても四曲程度にはなると思いますよ」

「どう？」

桜は隣を――つまり私の方を――向いて首を傾げる。艶やかなサイドテールが視界に漆黒を添える。

うむむ、と私は顎に手を当てて考える。四曲か……。少し多い気がする。ていうか、明らかに多い。無理だ。

私はラッパッパの作曲担当な訳だけど、今回のライブコンセプト的に、今まで作ってきた作品たちのようにラブ一辺倒ってわけにはいかないと思う。新たな挑戦になる訳だ。

それに、私は受験生でもあるわけだから。テスト近いし。――あまり気乗りしない風の作曲に時間を割きたくないというのもある。

要するに面倒だ。

が。

桜はこちらを期待した目で見ている。

「何とかする」

ライブの細かいことが決まったさしあたって重要なのは一バンドで五曲、系三十曲で決定したことだ。四曲って言ったじゃんか。歌う順番は最後。ポピパ、Ｒｏｓｅｌｉａ、アフグロ、パスパレ、ハロハピ、そして私たち。もう、既に練習は始まっていた。勿論、各バンドとの顔合わせは済んでいるし、曲の入ったＣＤも貰っている。練習は、各バンドと同じ日程で行う。ポピパ、Ｒｏｓｅｌｉａ、ハロハピ、アフグロ、パスパレ。週に一回ずつの合同練習だ。なんで一緒にするのかって、私は五曲をそれぞれのバンド歌にしようと思っているからで、その取材だ。こんなにも多くのバンドと週一で練習できるのも、五バンドのメンバーが揃いも揃って花咲川か羽丘の生徒――どちらも女子校で中高一貫なのでお嬢様学校って感じだ――だからだろう。世界が狭い、といった感想しか出てこない。

「ちょっと休憩にしましょうか」

と、アフターグロウのボーカル＆ギター担当美竹蘭が言う。アフターグロウの面々は口々に一息ついて、張り詰めた重い肩を落とす。私たちも同様、いや、もっと酷い。普段から猛練習しているであろう三人組は涼し気な顔をしているけど、桜は椅子にもたれかかって空を――天井だが――仰いでいる。相当疲れたらしい。かく言う私も、膝を肘置きにして前のめりに俯いていた。さすがに五曲続けては息が苦しい。練習曲にそれぞれのバンドの曲を希望したのは間違いだったかも。

「佐藤さん、さっきの、サビのところのアレンジ、すごく良かったですよ。あんなのいつ考えたんですか？」

「あ！　それ思った！　めっちゃカッコよかったですよ！」

「こう、ズガシャーンって感じでしたね」

「ズガシャーンじゃダメじゃない……？」

ギターボーカル美竹蘭、ベース上原ひまり、ドラム宇田川巴、キーボード羽沢つぐみ。なんとドラムの巴は宇田川あこの姉らしい。本当に世間の狭いことだ。その頃、ギター担当の青葉モカはおやつに持ってきていたのか、カバンから漁ったパンをぱくついていた。商店

街の、『山吹ベーカリー』で買ったんだろう。山吹ベーカリーはかなりの人気店で、山吹沙綾の実家という話だった。なんだか、この街にいると少し歩けば知り合いの影がある。

「――うん？　ああ、アレ……。いい感じだったなら良かった。まあ、二度は出来ないけどね」

「即興でしたか……。なんだかポピパのボーカルみたい」

「でもめっちゃいい雰囲気でしたよ！香澄にあの音は出せないんじゃないか？」

絡まれた桜がこっちを寂しげに見ていた。気持ちはわかる。でも、よく見てみるとヤンキーって訳じゃない。

美竹蘭は肩口で切り揃えた髪に赤くメッシュを入れてるし、宇田川巴は背も高く髪も赤みがかって染めてみえ、女子校育ちの割に言葉遣いも男の子でも荒っぽいと言えるだろう。単純に、怖い。でも、それは育ちと地毛の色の差だろう。ベースの上原ひまりは桃色っぽい髪色をしているけど恐らく地毛だ。青葉モカは銀灰色だが、根本まで同じ色なので多分ハーフとかクォーターとか。花咲川や羽丘に通うか弱い乙女達が共にライブしていて、楽しそうに紹介していたことから、物腰柔らかな人達なんだろうことも予想できる。怖がるものじゃない。

「やー、なんてーか、その……。即興だけは昔から得意でさ。それだけが取り柄っていうか」

と、桜は言うが。違う。

桜の音楽には、個性がある。それこそ、周りと合わせられず、部員全員から退部を勧められるほど、強い個性が。それは私たちの中でさえ一際強く輝いている。演者を残さず平らげてしまうぐらいの強烈なモノ。それでいて違和感のない。ずるいと思う。桜は才能があるから。私が手を伸ばしたって届きっこない。

「――枝って、なんですか？」

「よく分からん」

と、そんなことを考えていると、桜と宇田川さんの話はあらぬ方向へと飛んでいた。『枝』ってなんだ。

「枝は枝だよ。でしょ、いと？」
「うん、枝」
「大宮さん発案何ですか？」
「うん」
よくわからないけど、桜かをそう言うならそうだ。何がとかじゃなく『枝』なんだろう。
「へ～。そういえば、お二人はプロとか目指してるんですか？」

プロとか良く分かんないかな、と曖昧に笑う桜
「やっぱり、音大に行くんですか？」
その言葉で、場は凍った。
いや、そう思ってるのは私だけだ。ほんの一刹那、顔から表情が消える。桜に《進路》は禁句だ――。
「あ、はは。それもよく分かんないかな……」
一瞬、ほんの一瞬だけ、桜の顔に影がかかる。ほんの僅か、初対面の人には分からない程度に――。やっぱり、《まだ》なんだ。
しかし次の瞬間には「いやー悩んでてさー？」とまた明るい声にもどる。アフターグロウの面々は、それに誰一人気付かない様子で、談笑を続けている。
私だけが、無表情に、まるで金縛りにでもあったかのように怯えていた――。

「――薫君は粒が荒く聞こえますね。演奏自体は上手いので、丁寧に演奏すれば大丈夫です！
――はぐみちゃんは、所々音を落としてるから、楽譜をもう一度読み込んでみようか。演奏自体は上手いから。
――松原さんはちょっと力が弱いかな。もっと勢い良く叩いてみよ」
「「はい！」」

ハロー！　ハッピーワールド！　の面々は素直に桜の指示を聞いていた。場所はハロハピのリーダー弦巻こころの自宅、応接間――かどうかはわからない。なんか、広い部屋――だ。なんと弦巻こころは世界に名を轟かせるあの弦巻グループのご令嬢らしく、家が馬鹿みたいに広い。大学とかそぬくくふふふふういう施設よりも広いと思う。

輝く金髪、同色の眉毛、虹彩。若干子供っぽい顔立ちは本当に高校二年生、一歳違いだろうかと疑ってしまう。パートはボーカル。好奇心旺盛な性格、奇天烈な発想で、バンドスローガンと同じく人を笑顔にするために行動する。桜となにやら通じ合うことのありそうな感性をしている。

「いやー、やっぱり、凄いですね……。音楽やってる人から見た、客観的な意見ってなかなかないんで……感謝してます、ほんと」

ハロハピのメンバーに頼まれた桜の《指導》に、ＤＪの奥沢美咲は代表して感謝を述べる。自分たちで黙々練習していても限界があってどこが間違っているか分からなくなるらしい。それで、私たちに音を聞いて欲しいと頼んできたのだ。ま、ハロハピは演奏より笑顔っていう考えなのでこちらも指摘がしやすい。

「みんなからはなにかある？」

「……奥沢さん、動きにキレがない」

「ヴェ」

恐らく疲れてきているんだろうが、彼女は本番ではクマの着ぐるみでパフォーマンスを行う。体力は必要だ。私がそう思った他には、ほかのメンバーからは何も無いようだった。相変わらず主張が少ない。いつも三人で相談して、自分たちのオトを手直ししている。

「ところで……今日はミッシェルはどうしたんだい？」

粒が荒く、という指摘を受けて演奏をさらに《儚く》しているギター瀬田薫が思い出したように言う。

「あはは、今日はお休みなんだ……」

「そうなの、残念ね！」

「今日はいつも通り、代役ってことで」

尚、その事は彼女曰く三バカ――ボーカル弦巻こころ、ギター瀬田薫ベース北沢はぐみ――には内緒、らしい。夢を壊したくないのだとか。三バカ、といえばここ数十分の練習の間だけでも個性が強い三人なんだと分かった。いったいどういう形でミッシェルを信じているのか分からないけど、口裏を合わせるくらいなら構わないと思った。

「ちょっと休憩したら、また通してみよっか」

ドラム松原花音の声掛けで、メンバーは一斉に脱力する。私も楽器を持ち直して、少し休憩する。

「あ、はぐみ、コロッケ持ってるよ！　休憩中に食べようと思って持ってきたんだ！」

「それはいい。通し練習に向けて英気を養うため、コロッケパーティーと洒落こもうじゃないか」

「はぐみ、ナイスアイデアだわ！　今お皿と箸を持ってこさせるわね！」

と、流れるようにコロッケパーティー？　の流れが決まった。比較的まともな松原さん、奥沢さんに話を聞くと、いつも通りなようだ。最も、普段は弦巻家の用意した紅茶と茶菓子らしいが。

弦巻こころが部屋の隅に待機していた黒スーツの女に指示を出す。黒スーツ女はすぐに部屋を出ていった。コロッケの大皿とそれぞれの取り皿を取りに行ったらしい。

少し待てば、コロッケは直ぐに皿に乗って運ばれてくる。それぞれ箸を手に取って食べ始めた。私は油がついたら嫌なので遠慮しておく。

「――それにしても、先程の演奏は素晴らしかった。改めて礼を言うよ、ラッパッパの子猫ちゃん達」

と、急に何かを《切り替えた》瀬田薫が振り返って、キザったらしいキメ顔で言う。桜の方が格好いいと思うが、このギターは度々、というか、常にそういう態度をとる。

紫暗に近い色の髪をかきあげ、切れ長の目を細め、端正な顔を大真面目に引き締めて、長身に長い手足を存分に振り乱して格好をつける。根っからの役者なんだろう。額面通りに受け取ればただの変態

だ。
　他人のことを《子猫ちゃん》と呼び、バンドメンバーを《お姫様》と呼び、シェイクスピアだかニーチェだかの言葉をたびたび引用する。紛うことなき変態である。
　ひょっとしたら、自信の無い人なのかもしれない。
「いや～、はは。そうかしこまって言われると照れちゃうよ」
　桜は照れたように笑う。他メンバーも同じようにする。
「やっぱり、練習もかなり厳しいんですか？　元吹奏楽部って話だし」
「私も気になるね」
「そんなことないよ。最近は毎日吹いてるけど、基本週三だし。ま、なんだかんだでみんな自主練してたりするけど」
「へー……やっぱり、毎日吹くことが大事なんですか？」
「そうだね。１０分だけでもやってると違うよ」
「なるほど、継続は力なり……つまりそういうこと、だね」
　などと合間に言葉を交わす桜と奥沢、瀬田である。毎日練習とは、上手く言ったもんだ。毎日練習、なんてのは他三人についてのことで、私と桜はしてない。ただ、毎日テキトウに音を出して掛け合っているだけである。練習とはいわない。勿論、音楽教師を呼んだきちんとした練習は週三だが、それ以外は先生の都合もあって遊びのようなものだ。だからこそ、最近の練習量は少し辛いものがあるけど。そういうのもあって、桜は毎日練習しようと思いたったのだろう。少し見栄を張ったようだ。
「家では練習しているんですか？　テスト中は部活ないですよね？」
「音をあまり鳴らすと、近所迷惑になってしまわないかい？」
「はは、家での練習は、ちょっと抑えてるよ。住宅街だしね。吹きたくなったら、外に出るんだ。公園とか」
　正しくは、一週間前からない。高山高校のレベル自体が高いこともあって――私と桜は学力入試だったのだが、正直落ちたかと思った――、私たちも勉強に時間を多く割いている。十分、というのはテスト期間中、私たちが二人で音を合わせている時間だ。
「へー。……どういった練習内容なんです？」

「私も気になるな。今後演劇部で管楽器なんかを演奏しないとも限らない。後学のため、教えて欲しい」
「ん～？　吹部と変わんないよ？」
つまり、走ったりする。
「へー……。今度、ウチの吹部覗いてみよっかな――」
「それがいいかもね。
……そろそろコロッケも終わりにして練習始めよ！」
パン、と手を叩いて大きな声で宣言した桜に、奥沢美咲は慌てて給水を済ませる。コロッケをパクツイていたので口元の油も慌てて拭き取っている。
「そうか、つまり……」
瀬田薫のうかない表情を私の視界にだけ残し、練習は再開する。

「凄いです！　プロの伴奏と遜色ないですよ！」
とは、アイドルバンドＰａｓｔｅｌ＊Ｐａｌｅｔｔｅｓドラム大和麻弥の言だ。
彼女たちは生演奏バンドを売りにしたアイドルである。ボーカル・ふわふわピンク担当の丸山彩、ベース担当の元子役白鷺千聖（しらさぎちさと）、ギター担当の地底人？　氷川陽菜、キーボード担当のブシドー・アンド・ブシドー若宮イブ、そしてドラム担当の大和麻弥の五人。実は密かにファンをやっていたりする。
中でも、大和麻弥はパスパレ一の機材・音楽オタクとして知られている。機材全般が好きで、話すと撮影しているのも忘れ止まらないこともしばしばある。その知識……教養の高さは全国に点在するファン一同や果ては専門家なども認めるほど。仕事柄、プロの伴奏に合わせて演奏することも多いことも考えると、大和麻弥の賞賛には一定以上の信憑性があった。
嬉しい。わざわざお金を払って現場に行く程ではないが、それでもテレビに出ている時は録画予約をする。気が向けばキーホルダー代わりにグッズの購入をする時もあった。そんなアイドルの人に褒め

られて、多少は嬉しいんだ。
ちょっと、ドヤ顔をした。
「イトさんは、どうして自分たちを推してくださるんですか？」
そんなことを言われる。
困る。馴れ初め――というのもおかしいか、ファンの欠片の始まりを話すのは構わないけれど、私は『推し』と呼べるほど貴方達を愛していないから。そこまで熱心なファンという訳でもない。ＳＮＳでフォローする程度の、『憧れ』とでも言うのが正しい。
「……人付き合いが上手くないから、憧れる」
そうだ。私がちゃんと喋れる相手と言えば桜くらいで、後はドモってしまったり言葉に詰まったりが多い。とは言っても、その桜相手にでさえ明るく話せるとは言えない状況だし、高校生になってからは話す時に緊張してしまうようになった。
そんなわけで、私はコミュニケーションが苦手だ。コミュニケーション障害、とでも言えばいいのか。そこまで大袈裟ではないかもしれないけど、問題を視認するにはそれくらいの方がいいか。そんなだから、テレビの前で歌って踊ってのアイドルには元々惹かれるものがあった。自らの容姿を客観的に見つめて、武器ではなく商売道具として使うその姿勢にも好感が持てる。
「デビューの時の……。その、悪い言い方になるかも知れない。ごめんなさい。
――デビューの時の、あの事件で知って、その瞬間にダメだと思ったけど」
「あ、あのときですか……」
大和さんはポリポリと頬をかいて恥じらった。
というのも、パスパレのデビューの時の事件についてだ。パスパレは生演奏バンドとして売り出していたが、お披露目ライブの際、機材トラブルによって音が消えてしまい、口パクがバレてしまったのだ。来場者数一万人を騙し、その瞬間に嘘がバレてしまった。その時のことは今でも動画サイトに纏められている。私も当時、動画サイトのトレンドで見た。音楽を聞いていて、たまたまアイドルバンドの様子を

公式生放送していたから、開いてみると、どうだ。口パクだというのは聞いた瞬間分かった。口の形が明らかにズレている。指も全然だった。多分、楽器をかじったことのある人なら分かる。まあ、よくある事だ。でも、音響トラブルで音が消えたから、暗黙の了解とも言えない状況になっただけで。

「散々な言われようだったのに、ずっと頑張ってた。何よりも、」

「そういうところ。努力、というより、それを支える心が、しっかりしてカッコイイ……と思う」

思ったよりちょっと恥ずかしい。私、なんで好きなアイドルの前で好きになった理由を語ることになってるんだろう？　桜は、と見渡すが、練習スタジオにはいなかった。麻耶さんと話していたからだろうが、私は何も聞いてないのに……。

「――いやぁ、なんか、照れますね。そこまで持ち上げられると謙遜するのも失礼かと思ってしまいます」

本当に思っていることだ。頑張っている人を冗談でここまで突き上げるほど私の性格は悪くない。でも、それをちゃんと伝えられないあたり、私もまだまだだ。

「フヘヘ……。因みに、五人の中で一番好きな方は誰ですか？」

その質問にどう答えればいいのか、悩んでいる私に休憩中の丸山さんと白鷺さんもやってくる。氷川陽菜さんはスタジオにはいなくて、席を外しているようだった。

「彩さん」

「やったぁっ！　えっ！　本当に!?」

「彩ちゃん、喜ぶのはいいけれど、驚くのと逆だわ……」

白鷺さんが丸山さんにツッコミをいれる。どうやら、テレビなんかで見る二人の関係性はまんま、舞台裏でも行われているらしい。白鷺さんが私の前ということを意識していなければ。してるんだろうなあ。

「大宮さんの目から見て、彩さんの心が一番しっかりしているように見えた、ということですか？」

頷く。

「同じボーカルだから、っていうのも、あるけど」
でも、だからこそ、丸山さんの輝きたいと願う心っていうのが伝わってくる。
「心……。しっかり、しているかしら？」
「してるよっ！　もうっ！」
――さあ、休憩は終わりにして練習しよう！　私たちは、ただでさえスケジュールの関係で他バンドに迷惑かけてるんだから！」
「あははは……しっかりしてますね、彩さん。そうと決まれば、練習しましょう！」
「日菜ちゃんと佐藤さんがまだだけど……先に始めましょうか」
と、丁度いいタイミングで扉がコンコンと叩かれる。桜だ。広いスタジオの中を歩いて扉を開けると、ノックリズム通り桜がそこに立っていた。練習再開の雰囲気に気付いてすぐに髪を揺らしつつ席に戻る。それを見て、私も席に戻った
続いて、日菜さんが入ってきた。足音的に、廊下で合流したとかだろうか。日菜さんもすぐに練習モードに入ってギターのショルダーベルトを肩にかけて、集中する前に、私の方を見る。
「大宮ちゃん、今度は手抜かないでね？」
「……――は？」
悪気はないだろう、純粋な質問が、パスパレ事務所の練習スタジオに響く。私は知らず、涙を流したらしい。
私を庇う桜の冷たい声だけが頭の中に響いている。

叶わないなぁ……。
初めての演奏を終えた感想はそんなものだった。正確さという点に置いて彼女にかなうものはいない。自分でさえダメなんだから。彼女は存在自体が音楽みたいなもので、その頭の中にはきっと音が溢れていた。そんなのに、勝てない。
中学の時の音楽発表会で、どうしようもなく、彼我の《差》を思い知らされた。嫌というほど《理解》させられた。努力だとか才能だと

か、そういう現実的な側面とは逆位置で、彼女と触れ合い、その境界を知った。

手元の楽器に映る自分の目を見つめる。自分は《音楽》じゃない。あくまで《音楽》が好きなだけだ。

暗く沈んだ瞳。自分の目とは思えないくらいにドロドロに濁っている。

周りの人は、自分に「負けてない」という。——だから頑張れと。

そんなこと、自分が一番よく分かっている。長所と短所くらい。《負けてない》ことも分かる。でも、それはあくまで巨視的視点で見た、客観的なまやかし。ある部分で《負け》ているのに、他の部分の《勝ち》で慰めているだけ。

そしてその構図は、自分が頑張って《勝ち》を維持する限り、彼女が頑張って《勝ち続ける》限りは、絶対に変わらない。そういう風にできている。

ああ、だから、もう。

追いかけるのは、やめようか？

四話

「あ！　いたいた。おーい！　こっちだよー！」

高山高校――高山高等学校の正門前、他校であることに加えて男子も通う共学校で、女子校の花咲川の制服に身を包んだ燐子と香澄は大変に注目を集めていた。女子校生、と言うだけで目立つのに、燐子と香澄は縄張りのほど近いバンドマンとして多少は目に触れるし、何より、香澄の《ネコミミ》と大きな声と動径いっぱいに往復する腕の影響で余計に目線が集まっている。本人は《お星様》だと言っていたが、燐子は言葉通りに受け取ってはいなかった。香澄がそう言うからにはそうなんだろうが、燐子にとっては《ネコミミ》なのだ。そう思ってみれば、香澄の気分によってしなだれたり張り詰めたりしているようにも見える。ただの首の動きだが、そうやって考えた方が燐子は何となく癒される。兎に角、ただでさえ自他（燐子・あこ）ともに認めるコミュ症の燐子は置かれた状況に頭が《やられて》しまい、ネコミミをただただ見つめるくらいでしか意識を保つ方法がなかった。

一方、香澄はと言えば、何も考えていない。ただただ楽しいだけである。他校、と言うだけでキラキラドキドキして、興味本意でに走り出しそうになるのを燐子の手前、手を大きく降って大声を出すことで妥協していた。彼女は外部生であり、燐子と比べて男という種に対して慣れがあるからこその状態である。もっとも、燐子と比べてしまえば、人への慣れもそこに加算されるのだが。

学校の玄関を抜けて出てきた佐藤桜と綸（いと）は並んで歩きつつ、ゆっくり香澄たちの前にやってきた。二人とも、それぞれの楽器を抱えている。

「二人とも、練習は大丈夫だった？」

「今日は休み！　ポピパとロゼは？」

「ポ、ポピパも休み！」

「Ｒｏｓｅｌｉａも……今日はないです」

良かった、じゃあ、ホリデイ仲間だね。と、桜は快活に笑う。香澄が、仲間ー！　と両手を挙げたので桜も一緒に挙げる。燐子は終始怯

えて、記憶が飛びそうだった。
　綸（いと）は燐子に遠慮したのか、両手を挙げなかった。
「じゃあ、今日はどこに行くの？」
　と、歩き出しつつ桜が問う。燐子の顔色は青白かった。
「うーん、決めてない！」
「じゃあ、みんなどこにいきたい？」
「カラオケ！」
「……一旦、喫茶店でも入ろう」
　クラクラと目を回し始めた燐子に肩をかしつつ綸（いと）が言う。ようやくその様子に気付いた香澄は『ごめーん！』と燐子に抱きつこうとして桜に阻止され、燐子を支える係を綸（いと）と交代する。
「ごめん、なさい……。私……」
「ううん、全然大丈夫だよ！　むしろ、謝るのは私の方……。ごめんね？」
「いえ、そんな――」
「いやいや、本当に――」
　謝罪合戦を始めた燐子と香澄を連れ、綸（いと）は早速近くのファミレスを目指すべく、近くのファミレスまで目指して歩く。駐輪場まで自転車を取りに行った桜に、早く来て、と祈りながら。

「ごめんね、自転車置いてこさせちゃって」
「平気」
　香澄の謝罪に、綸（いと）は首を振って答えた。マイクをオンにしたまま喋る香澄との声の大きさの違いに、香澄自身、ちょっと面白いと思ってしまう。
　――って、そうじゃなくって～……。
　カラオケルームで、意図せず発生した香澄と綸（いと）だけの空間に香澄は焦っていた。桜が二人分の飲み物を持って部屋に戻ってくるまで、燐子が戻ってくるまで。あとどれ位、悩む時間があるというのだろう。薫、日菜からは『理由を聞き出せ』と個人的に頼まれてい

る。しかし同時に、それが難しいかどうかの判断は副隊長に任せる、とも言われているのだ。香澄は、正直言って嫌だった。まだまだ綸（いと）とは親密な間柄ではないからだ。それに、本人すらもあまり意識していないが、綸（いと）が悩んでいるのなら今のうちに追いつくチャンスが、とも心のどこかで思っている。友達の力になりたい。でも、少し怖い。そんな風に悩む、普通の女の子だった。

「あ、あのさ！」

「ただいま～――て、あれ、ごめんね？」

その戦いが丁度決着した頃、香澄の勇気と良心もむなしく、扉前に近づく足音に気付いて扉を開けた綸（いと）によって阻まれてしまう。開いた扉の先には桜が二つコップを持って立っており、すなわち猶予時間の終了を意味していた。

「待って！　なんで分かったの!?　今ノックも何も無かったよね!?」

「ああ、綸（いと）耳いいからさ」

「凄い！」

「……カラオケは、少し聞き取りにくい」

「ほんとだ！　カラオケだここ！　凄い!!」

なんて、香澄が驚いている間に、桜がさっさと曲を入力してしまった。

「いやー、カラオケ久しぶりだから緊張するー」

「桜は上手いから、大丈夫」

「そう？」

慌てて思考を切り替える香澄を置いてけぼりにして、ラッパの二人はデュエット曲を入力してしまった。しまった！　と、香澄は思う。でもその時にはもう曲のイントロは始まっていて、香澄と綸（いと）の間の空気感など一片たりとも残っていない。香澄は今日の作戦の失敗を自覚した。

――ま、まあ、今日は仲良くなるのが目標だし！　落ち込んでたら意味ないよね！

前向きに考えていくのは香澄の得意とする所で、いつもと同じように、今日とてそのポジティブシンキングに香澄自身が救われる。副隊

長として、燐子に――かなり情熱的に――お願いされた自分がここで凹む訳にはいかなかった。それに、燐子は極秘ミッションのことを何も知らない。落ち込んでいられない、と香澄は考える。

楽器の豊かな音が二つ聞こえる。歌うんじゃないんだ、と心の中で突っ込んだ。

――今は、楽しむだけだよね。

ミス一つない、正確な音を聴きながらそう思い直した香澄は、テーブルの上のタンバリンを手に取った。

コツン、と石ころを蹴った。部活をサボった帰り道、日は高く、汗が滲み出してくる。同じパートの皆に酷いことを言われるからだ。先月までは手放しに褒めていたのに、急に自分の演奏が気持ち悪いなどと言い出した。

その子達の演奏を聞いて、思うところがないわけじゃない。でも……。練習もせずに嫉妬だけは一人前な、どうしようもない人たちなら、もっと罪悪感も少なかっただろう。必死に練習しても、届かない人達がいる。そんな嫉妬の対象になってしまったんだ。自惚れでもお調子でもなんでもない確かな実感は、中学生には重い。重すぎる。

そんな思いをしてまで吹奏楽部に居る意味は無かった。確かにコンクールには出たいけど、それ以上に、自分はストレスなく楽器を吹きたい。思い切り、澄んだ心で吹きたい。じゃないと、嘘だ。音楽なんて簡単に嘘になってしまう。彼女に追いつけない。

――明日には退部届を書こうか。もう、変な執着も心残りもない。さっきはちょっと落ち込んだけど、それも石ころと共に川に落としてきた。そういう人間関係のアレコレは、高校に行った時、今度こそ向き合う、でいいだろう。今はただ、音楽を見詰めるだけで――。

石段をリズムよく登る。歩幅を意識して軽快なステップ。体を好きなテンポで揺らす。それらを全て別々に行い、体全体で一曲を、オーケストラを再現する。

楽器の入った手提げ袋を強く意識する。歩きなれた、同じ地域地区の家を目指して歩く。一刻も早く吹きたいと、体の全部が焦っている。

五話

「有紗、今日、有紗ん家泊まってっていい？」
「はぁ？　いきなりだな……。ばあちゃんがいいって言えばいいぞ」
　でも、どうしたんだ？
　――有紗は、いつもと違う様子の私を心配している風だった。そんな有紗の目の奥を見て私も、今はちょっと《違う》のかも、と気づく。キラキラドキドキって感じじゃなくて、ただ単に必死なだけなんだって分かった。
　それじゃダメ。努力とキラキラドキドキがセットでくっついてないと、音楽は奏でられない。
「いやー、ちょっとやる気になったっていうか……！」
「お前、さては大宮さん達に影響されたな？」
「いや～、どうだろ、あはは……」
　有紗は合点がいったように頷いて、私をジト目で見つめる。図星だ。あんまり良くないお星様だった。
「まっ、いいけど？　ただ、あんまりミーハーだと、いつかお前が歯ギターとかやりそうで怖いけど」
「それはちょっとカッコイイ……けどそんなことやらないよ～！」
　ギターも可哀想だし、歯も痛そうだし」
　実はちょっと憧れているのは内緒。
「でも、なんで急にそんなこといいだしたんだ？」
「実は昨日、桜さんたちと遊んだんだ～！」
　カラオケで遊んだ後、時間が余って、どこに行こうかって言っていた時、綸（いと）ちゃんが練習を提案した。オフの日までって言うのはちょっと驚いたけど、まあ、あんまりすることも無かったし。燐子先輩も綸（いと）さんも、目的なく街を歩くのはちょっと苦手っぽかったからね。
「それで？」
「実は、その……」

んん、ちょっと言いにくい。
「さっさと言え」
「だって……有紗、怒るし……」
怖い。あと、そんなに顔を近づけられると照れちゃうからやめて。
自分からじゃないと、スキンシップに照れが入るのは私のくせだ。
「……分かった、怒らないから言ってみ？」
「今度の連休、合宿に誘われちゃって……一緒に行くって約束したんだ」
「なんだそんな事か」
「それで、その……その合宿でライブがあるんだけど、その時に私、アコギでジャズ弾くことになっちゃって」
有紗は私の頭をぐりっとした。最近、こういうのが上手いから困る。
お互いがお互いに慣れてきたって考えれば、嬉しいことかもしれないけど。
「そりゃあ、お前、弾けんの？」
「弾けないけどさ！　でも、電気ギターの音は耳が痛いらしくって……」
「へー……。そういや、チャットでそんなこと言ってたな。大宮さん耳いいんだっけ」
「すっごく！」
ものすごく耳がいい。確かに、すぐ隣とかでジャカジャカやってたら耳も痛くなると思う。文字通り『つんざく』ってやつ。
「んで？　連休明けまではそっちに集中すると」
「ていうか、ほとんどそっちにかかりきりになりそうかも」
「ん……分かった」
「ごめんね、いつも無理させて」
「今回は事前に言っただけマシだ。ま、悪いと思うならもっと計画的に物事を進めるべきだな」
なんて難しいことを言う有咲。そう言われても、ポピパの企画する係は有咲か紗綾が担当することが多いから私は分からないのに。

「ごめんね」
「いいよ、別に」
むう……ちょっとトゲトゲしい？　態度もどことなく引いた構えでいつものような抱きつく隙を感じないし、なんだかイライラしているオーラが見える、気がする。
「ほんとごめんって。私だって有咲がいなくて寂しいんだよ……。紗綾もいないし」
「ふーん、そうなんだ」
お、ちょっと機嫌が良くなった？　相変わらず有咲はチョロくて助かる！
「有咲は私がいなくて寂しい？」
「別に、寂しくはないけど？　……それとも、香澄は私にそう言って欲しいの？」
「言って欲しいなぁ～」
「仕方ねぇなぁ」
うん、いつものポピパだ。

「戸山さん、大丈夫？」
綸（いと）さんが進んで発言するほど、私は不安定なのかと心配になった。楽器を持っているのにポピパと一緒じゃないっていうのが新鮮って訳じゃない。確かに珍しいことではあるけど、それは今までもあったし、突発的にライブしたこともある。
多分、お泊まりのせいだ。初めて紗綾の部屋に泊まった時、蔵で寝た時、私はいまと同じような気分だった。どこまでも高揚していく気持ちを誰かと分け合いたくて仕方ない感じ。でも、今はポピパメンバーもいないからあんまり調子が出ないってだけだ。有咲には寂しいかとか聞いておいて、一番に寂しいのは私だったのかもしれない。
「あはは、ちょっと緊張してるだけ！
――ラッパッパの皆さんって、こういう車でライブに行くことってよくあるんですか？」
「たまに、かなぁ。バンドとして活動する時、部活として活動する時が

あるからね。部活として行く時は、先生が車出してくれるかな。学校に報告したら、移動費でるからさ」

「へぇ、いいですね、それ。どういう時に部活で活動するんですか？」

「先生の予定が無くて、車が動かせる時かな～」

キャンピングカー（？）のソファはフカフカで、ライブで遠出をする時にこれに座れたら最高だな、と思った。その分ガソリン代がかかるらしいけど、ラッパッパの実力には学校にも何も言えず、黙ってお金を出してくれるらしい。実際、ラッパッパが学校で生演奏することが多いからってためだけに高石高校に入るって人もいるくらい（ＳＮＳでそんなコメントがあった）だし。結構凄いバンドだ。

ポピパもラッパッパぐらい上手ければ、お祭りの時、予算もすぐに出たんだろうか。

『――香澄、君は案外、ピュアな所がある。気をつけた方がいいかもしれない――』

あの時の薫さんの言葉が耳に蘇る。私だって、嫉妬しないわけじゃない。

「顧問の先生、優しいんですね」

「うん。優しい。優しいけど、顧問じゃあないかな」

「えっ」

「音楽の先生だからってことで副顧問的に軽音楽部見てもらってる。顧問の人は吹部の方で忙しいし」

良く分からない話だった。

「でも、先生の方はそれでいいんですか？」

「いいんだよ。学校側はどうせ黙ってるだろうし、先生には補習の手伝いとかをよくやってるしね。先生の知り合いの音楽教室の手伝いとか、させてもらったりしてるんだ」

「へー、凄いですね！　先生と仲がいいんですか？」

「うんうん、そうなんだよ。それで更にはね――」

更に聞き出そうとした時

「桜」

綸（いと）さんがめをつむったまま（さっきまで寝てた？）、桜さん

を呼んだ。
「海が見える」
「――うん？　あ、ほんとだ」
桜さんの声で、車内の全員の視線が窓に向く。その先には綸さんも言った通り綺麗な海。太陽の光を浴びて、表面がキラキラと輝いていた。
「綺麗……」
「海、好きなんですか？」
「え？　――あ、ああ、ごめんね。うん、海は好きだよ。深海生物とか」
へぇ、とまた新しい知識が増える。桜さんは海が好きなんだ。綸さんも海が好きなのか聞いてみると、「綸はどっちかっていうと爬虫類だよね。ヘビ飼ってるし」らしかった。今のは桜さんに綺麗な海が見えることを知らせただけだったみたい。でも、それくらいに綺麗な景色。
ぼーっと海を眺めていると、地図を確認した桜さんがもう一度海に目を細めるのが視界の端に見える。
「さて、今夜の宿はもうすぐかな？」
「うん」
そこから、キャンプに似会うコテージ（？）を見付けるまでは、桜さんと綸（いと）さんの会話をＢＧＭに寝て過ごした。

ちょっぴりの寂しさを海に残して始まった合宿の日々は音符の羽で飛んでいるかのようにあっという間に過ぎていった。朝の８：００に起きたら朝食の後練習、お昼を挟んで練習、少し休憩の後にまた練習、夜ご飯を食べた後に少しだけ練習をして、お風呂の時間があり、その後は２３：００の消灯まで自由時間だった。最も、これは私が決めたことであって、決められた練習時間は無かった。それぞれが勝手に練習する、といった感じ。もちろん、練習には先生が付き合ってくれるけど。皆自由に休憩をとっているみたいだった。特に綸さんは朝に弱いのか遅く起きることが多い。っていっても９：００くらい。

ここまで練習漬けの日々は私になかったから、指が痛くて痛くて仕方なかった。だとしても、ライブは待ってはくれない。私だけが特別に多く練習メニューを設定しているのは、まだまだ目標が『ミス無く、滑らかに弾けるようになる』だからだ。五人は、既にそんな所にはいなくて、表現力だとかアレンジだとかをそれぞれ磨いているのだった。

だからこそ休憩時間が重要なんだとも思うけど、やっぱりみんな、何も言わなくてもそれなりにハードな練習を課している。綸さんと桜さんなんて、休憩中ですら何かしらの曲を演奏している。聞いてみると『休憩でしょ？』と言われたけど、私はその時ばかりは二人が怖くなった。

とはいえ、その甲斐もあって、私の指に巻かれたテーピングの数だけミスは減っていって、他のことを考えるだけのスペースも生まれた。

綸さんの演奏が、日に日にやせ細っているのがわかったのはそんな時。それまで指の運びしかなかった私の頭も少し休める場所を見つけた、じゃないけど、息抜きも必要ということで、私はその問題に改めて取り組んでみることにした――。

「何してるの」

と、そんな声が足音に混じって聞こえる。綸（いと）さんの声だ。

「桜さんはいないんですか？」

「お風呂……」

何故か残念そうに呟く綸さん。一緒に入れなかったからだと思う。私も、泊まりの時くらい有紗とかポピパのみんなとかと入りたい気持ちはあるし。

「一緒に入るってわけじゃないんですね」

「……恥ずかしいからダメだって」

「それ、私に言っていいやつですか？」

「嘘。恥ずかしいのは私」

「あんまり変わらないような……」

さすがに一緒にお風呂にははいらないのか、と聞いてみると、『今日は戸山さんと三人もいるから』と返ってきた。二人きりじゃないから、自重しているらしい。

「……戸山さんは」

「星を見てました」

私は先にお風呂を頂いていて、湯冷ましにコテージのベランダに出ていた。何となく空を見上げてた。お風呂上がりは、無性に星を見たくなる。

「角がない」

「お星様です！」

へえ。

そう、興味なさそーに呟いて、断りをいれてから私の隣に座る。同じように星を見上げた。

――キラキラドキドキする。星の鼓動。

ドク、ドク、ドク。

聞こえてくる。

綸さんは夜空に手を伸ばした。

細い、白い、お風呂上がりでちょっと色がついた手が夜空に浮かぶ。マンガみたいに細長い指が星を絡めとるように動いて、ぐっと手前に引き寄せられる。

分からないの視界からはそのまま、フェードアウトする。

星を掴んだのだろうか。近付いたのだろうか。

同じように手を伸ばす。ギターを弾く時は指をぐにゃぐにゃにしてしまうので、ギターを持つ前とは違って柔らかくなった指。血が出て、少しずつ硬くなっていった指先。

「まだまだ、届かないなあ」

どれだけそれを伸ばしたとして、届かない。私はただ、星の鼓動を聞いているだけだった。

「星に手が届くようなちっぽけな世界にはいたくない」

突然、綸さんが呟いた。

「受け売りだけどね」

「……あの」
今しかない。そう思った。
「最近の綸さんの演奏……なんか、ちょっと」
「いや、十分上手いんです。誰も届かないくらいに上手いんですけど……なんか……。えっと。
――本当に、キラキラドキドキしてますか」
聞いた。
聞いちゃった。
なのに、質問とは反対に、私は綸さんの演奏の違いが良く分からない。桜さんはいつも通りにキラキラドキドキでいっぱいだけど、綸さんの演奏が何か違う、と言われてもよくわからない。いつも通り、機械以上に正確な演奏だ。最近はちょっと調子が悪いらしいってのは分かるけど、そこまで心配することでもない気もする。
まあ、燐子先輩も、日菜さんも、薫さんも口を揃えておかしいと言うからにはおかしいんだろうけど。それならなんで自分で聞かないんだろうってことになって、答えが出ないから考えないことにしている。
単純に考えよう。
ラッパッパの助けになれるなら、それは嬉しい。
うん、そんなもんでいい。
「戸山さんは」
「……――ううん、なんでもない」
一瞬だけ、綸さんの瞳に、優しく強い星が見えた気がする。
それを逃さないように、私は「ちょっとまってて下さい」と言い残して、ベランダからコテージの中に入る。少し冷えてきたけど、寒いからだとかそういうことじゃなかった。
『――香澄、綸を笑顔にするには、一緒に演奏をすればいいわ！　綸は桜と演奏している時、いちばん綺麗な笑顔を見せてくれるもの！
それに、なんとなく、演奏なら気持ちが伝わる気がするの！　――』
こころんのそんなアドバイス。正直、上手くいくかどうかは分からない。でも、

『――心配しなくても大丈夫だよ。香澄ちゃんがきっかけでガールズバンドパーティは始まったんだから、今回もきっと大丈夫。――』

日菜さんの言う通り、私たち２５人は音楽の下に集った。今回もきっと、音が夢を叶えてくれる！

私は部屋の隅に置かれていたギターのバッグ、【いと】と名札の付いた楽器ケースを手に取る。ギターは、ケースから出しちゃっていいかな。

と、慌ててベランダにかけ戻る。

「これ！　どうぞ！」

「うん」

「あのっ、一瞬に、演奏しませんか？」

伝われ、私の思い――！

――

演奏が終わったあとも、綸さんは暫く楽器を構えたままだった。

すう、と息を吸って、詰まる。なんて言おう？

話すことなんて考えてない。どうしよう……。

相変わらず、こういう真面目な話は苦手だ。どんなに必死になったって言葉が出てこない。どういう風に自分の気持ちを伝えたらいいのか良く分からない。薫さんや白金さんはこういう時は私の出番、みたいに言ってたけど、それはやっぱり違う。私じゃなくて薫さんならもっと多くの言葉でしゃべれたし、例えばこころんなら真っ直ぐ相手の目を見てありのまま自分の気持ちを喋ったはずだ。私には、そんなことは出来ない。

「私は」

ふっ、と笑った綸さんが手を下ろし、楽器を片付けつつ話し出す。

私の気持ちが伝わったなら良かった。音楽の力だ。

かつてないほどキラキラドキドキした演奏が、私たちの気持ちを繋いでくれた。この合宿に来て、一回の演奏に十箇所くらい指摘されて、私の演奏はずっと『かつてないほどのキラキラドキドキ』を更新し続けていた。

「桜が好き」

「……うん、それは知ってるよ？」
　というか、気付いてないと思ってたの？
　綸さんって意外と天然なのかも。
「すごく好き。本当に好き。物凄く、大好き」
　う、うん……。なんだか、聞いてて恥ずかしくなる話。
　でも、聞かずに、とはいられない。私が話してって《言った》から。
「香澄は、有紗が好き？」
「好きですよ」
　有紗が嫌いなわけが無い。
「大好きです。私が、ギターを始めたきっかけで、いつもキラキラドキドキをくれるんです」
「ギターが好きだから有紗が好き？　キラキラドキドキのない有咲は嫌い？」
「ううん――それはきっかけですよ！　こんなこと想像するのは嫌だけど――もしポピパがなかったとしても、有紗のことが大好きです」
　もしポピパが喧嘩して解散して、二度と会いたくなくなっても、次の日、私はギターを担いで蔵に行くと思う。
　アフターグロウじゃないけど、《いつも通り》、ギターをいじりながら有紗と話をする。有紗は放っておくと蔵に根を張っちゃうからたまに連れ出して、カラオケにでも行って……。山吹ベーカリーでパンを買って、ついでにりみりんにチョココロネを買って、帰ったらいつの間にか蔵に居たおたえとハンバーグを作る。
　結局、そういう風に離れられないんだな、と思う。音楽が繋げてくれた絆だけど、もう、音楽だけじゃ表せないくらいのものになっている。
「ギターより、ポピパが好きです」
「ポピパの中で、一番好きなのは？」
「それは……決められないです。みんな大好きで」
　うそ。本当は、有紗って言おうとした。だけど、私の中で微笑むポピパの皆が、その言葉を口の中に留める。
「《愛の告白》、《桜》、《存在》、《いとの向こう端》、《恋文》、《揺れる心》、

《私を見て》――。

既存曲はもちろん、新曲だって全部、私が桜に歌った曲。私は、桜に聞いて欲しいから」

やっぱりそうですよね！　とは言えなかった。ココ最近、練習で何度か一緒に演奏する中で気付いたことは、あんまり口にはしにくいことだった。綸さんたちが共学校に通っているのを知っていたからだ。歌詞を持たないけれどもどこか艶やかな、《落ち着いたドキドキ》、《ゆっくりとしたキラキラ》を私に聞かせた音は、男のコへのラブソングだと思っていた。

私が中学生までの男の子しか知らないのもその一つの原因だった。高校生の男の子って大人っぽくて、憧れだったから。大人な雰囲気な曲に自然と連想したんだ。

綸さんは可愛い。私でさえ中学の時何度か想いを告げられたことがある。綸さんは、その何倍もの想いを伝えられたことだろう。そのどれかを選んでいたとして、不思議はない。これは、私以外のガルパメンバーでは決して分からないことだろう。

でも、その予想はは今の瞬間に霧散した。綸さんが誰かと付き合うことは無い。桜さんとそういう関係にならない限りは。あるいは、付き合うことを桜さんに勧められてって事はあるかも知れない。

「桜が悩んでる時は私も苦しいし、桜が楽しい時は私も楽しい」

共鳴みたいなものなの――。

良く分からなず聞いている私が聞いたまま受け取るには、そうらしい。物理の先生が鉄のU字を叩いているのを思い出す。片方が鳴れば、もう片方が鳴るんだっけ？

「桜さんが本当に好きなんですね」

言えたのはそれくらい。

「桜の怒りは、私の怒り。桜の悲しみは私の悲しみ。桜の悩みは私の悩み」

その言葉には確かに、感情が篭もってる。でも、なんで？　なんでそんなに桜さんを――。

もし、私が有紗だけだったら？　紗綾だけだったら？　蔵と自宅し

か知らなかったら。山吹パンしか買わない人だったら。
それはそれで楽しいんだろうけど、ちょっと窮屈だ。ポピパのみんなにも心配かける。妹の明日香だっているし、両親も。何人も大切な人がいるのは、欲張りなのかな。
「――私はラッパッパよりも何よりも、桜が好き」
だからその言葉は、かなりの衝撃だった。私はバンドメンバーが好きって言った直後だったのもある。そんなに簡単に、人の好き嫌いを天秤にかけることも。
――♪
綸さんは再び演奏した。口笛で。その音の中に交じる葉擦れの音と共に、タヌキのような動物が三匹、顔を出してくる。適当な場所に座り、リズムにのって体を揺らしていた。
「好きなんだ――」
口から指を離し、酷く落胆した様子で綸さんは言う。動物は一つ礼をして、茂みの中にまた、帰っていったようだった。ちいさな観客の反応に綸さんも満足したのか、そのままベランダから部屋の中へと入っていった。翌朝、桜さんのベッドで発見されることだろう。
私はと言えば、また暫く、星を眺めていた。
日中の演奏でも怒られてばかりなのに、今度はよく分からない問題を抱えてしまった。
でも、悪い事だとは思わない。星みたいに、全部繋がってることだから。
それに、事情を聞いた以上はなんとかしなきゃだし、何とかしたい。
でも、何をしたら。
合宿に来ているのは分からないだけ。日中に電話するとしても込み入った話をする時間はないし、明日からは追加のメンバーも来るらしい。夜のこんな時間にみんなに電話する訳にも行かない。ついでに言うと、こんなややこしいことを文字で伝えられる自信もない。
私はもう一度、夜空を見あげる。星が輝いている。その鼓動は輝きを運ぶだけで、何も語りかけてはくれない。

六話

――～♪

ギャンギャンとうるさい声の中で、綺麗な音色が聞こえて、それを掴もうと手を伸ばしたところで目が覚めた。知らない天井の上によく知った手の甲が重なって見える。随分怪我して、テーピングだらけ、そのテーピングもかなり黒ずんでいた。

体を起こして部屋を見渡すと、隣にいる演奏者は大宮綸（いと）さんだったらしく私に気づくと楽器を置いて、おはよう、と言った。

「おはよう、ございます……」

「すぐ着替えて」

よくわからなかったけど、寝起きなのもあってとりあえず言うことに従ってしまう。私は歯磨きも洗顔もする前に、服を着替えた。

この声はなんだろう。着替えながら考える。

「桜バーサス他三人。急に辞めるって言い出して」

辞めるって、今日はライブ前日なのに？

それなら、この震えた怒声はもしかして桜さん？

なんで辞めちゃうの？

「早くして」

言いたい事は色々あったけど、今までにない綸さんの剣幕に押されて、私は自分でも驚く程早く身支度を整えていた。四人が争っている大部屋を通らないと洗面所には行けないため、外の水道を使わせてもらおう。

「楽器は？」

「いるんですか？」

「適当なとこで練習。音外してるようじゃ話にならない」

あはは、と苦笑いするしかなかった。音は昨日までの猛烈なしごきで一応は零すことはなくなった。後の課題は、少し走りぎみな所だった。難しい箇所は、どうしてもリズムより指が先行してしまう。それでも成長を自覚していたけれど、綸さんの基準で言えば、まだまだ《音を外す》段階らしい。

とりあえず、ということで、歯磨き粉と歯ブラシと洗顔、タオルだけ持って裏口から出る。リビングを通るのは避けて、外の水道でひと通り済ませることにした。

周りのコテージにも同じように外で済ませる人が大勢いた。でも、家の中で喧嘩中だから気を使ってって人は私達だけだろう。私が洗顔と歯磨きを終えると、背後に綸さんが櫛をもって立っていた。

「ちょっと髪をいじるのでまだ掛かります」

「そんなのしなくていい」

そんなの、って……。

最近の私の髪型の評価がおかしいことに若干頬を膨らませつつ、大人しく櫛を受け入れる。人から櫛を通されると眠くなるけど、その日ばっかりは喧嘩の衝撃でちっとも眠くなかった。

ザッザッ、と私の髪の間を櫛が通る音がする。気持ちいいけど、ちょっと乱暴だ。綸さんも怒っているのかもしれない。私を見てくれるために残ってくれたのかな。分からないけど、さっきの言葉は若干傷ついた。

出る時に渡されたポーチを広げると、化粧水やらなんやらが入っていた。どうやって使うんだろう？

とりあえず、化粧水とかいたボトルから少しだけ中身を手に受けて、顔に馴染ませてみる。前に化粧をした時、妹（あっちゃん）の手際をもっと良く観察しておけば良かった。

結局、私は化粧水を軽く顔に付けただけでポーチを閉じた。お化粧とかしないし、十分じゃないかな、とも思う。良く分からない。

「終わり」

そう言うと、綸さんは素早く化粧品のポーチをとって部屋の中に消え、それから楽器と小さなバッグを持って出てきた。担いでいるギターケースを受け取る。ギターケースを担いでいると煙突みたいなシルエットになって面白い。

「どこでやるんですか!?」

外でやるなんてテンション上がる。とりあえず、今は練習に集中しよう。今の私は、五人と比べて下手だから、とにかく練習するだけだ。

外の開放的な空気に――緑の、新鮮な空気に当てられたのかもしれない。痛む頭を抑えていた寝起きとは正反対の晴れやかな気持ちだ。

「丘を少し登ると、公園がある。日陰にベンチがあるから、そこで」

「分かりました！」

「昼頃に戻るから、早くして」

幾分か和らいだとはいえまだまだ鋭い視線を受けながら、遊歩道を歩き始める。

前方を小さな足で大股気味に先導する綸さんの歩調は、自分のものより荒かった。

昼になって、お腹を空かせて帰ってみると、コテージの玄関には二人の女性が荷物を持って立っているところだった。誰かいる、と思った所で、綸さんが一緒にライブする人、と呟いた。時々、綸さんは考えていることがわかるんじゃないかってくらいに鋭い。ともあれ、気分は大分安定したようで、良かった。

と、思ったら、遊歩道を帰りに歩く私たちに女の子達が近付いてくる。

「やっほー、大宮さん！　その女の子は？」

「ギターの子」

「戸山香澄です！　ＰｏＰＰｉｎ′　Ｐａｒｔｙってバンドのギターボーカルやってます！」

「あ、ポピパ知ってるよー。あの変わった掛け声の」

掛け声はおたえのセンスだからセーフ、とか思っていると、「ツノがないから気づかなかったよ」と言われてガックシした。

「あれは猫耳」

「へー、そうだったんだ」

「お星様です！」

というか、この人たちは誰だろう。昼頃から人が来るとは言ってたけど。

「中学の同級生とその連れ」

「ども。中学の同級生の、《リケジョ。》キーボードのアカリです！」
「こんにちは～。同じくその連れ、《リケジョ。》ドラムのアオイです、よろしく」
アカリちゃんが右手、アオイちゃんが左手をそれぞれ差し出し、私は両手を出して三人でよろしくした。
リケジョってのは、多分だけどバンド名だと思う。アカリちゃんが明るい感じの、ミルクティー色に染めたツインテの方で、アオイちゃんは黒髪を肩口に切りそろえた、目元にホクロのある優しそうな人だ。でも、バンドは当然ながら、ドラムとキーボードだけじゃ出来ない。本人に相当の魅力があれば別だけど。それこそ、綸さんほどでなくとも、Ｒｏｓｅｌｉａくらいには。
「他三人は」
「今回は辞退するって。課題が終わらないんだ～。私たちも終わってなくて、押し付けてきちゃった」
「ええっ、それ、大丈夫なんですか⁉」
「と言うより、メンバーみんなに『せめて二人だけでも』っていわれてね」
疑問に思ったのは綸さんも同じようで、私の心と同じ質問には私たち学生には耳に痛い言葉が返ってくる。
宿題って、ついつい溜めちゃうのは分かる……。私も今回の連休の宿題も有紗に泣きつくことになりそう。
「でも、宿題、ここに持ってくればよかったんじゃ？」
「あはは、それはちょっと難しいかな～」
「朝起きて、パソコン開いて、途中でご飯食べて十時くらいに寝る、みたいな生活だから、練習に参加出来ないんだ」
おおう……。
どうにも結構大変らしい。いや、綸さんと同級生ってことは高三なのか。綸さんとか桜さんが教えてあげればそれで済む気もするけど。まあ、色々あるんだろう。
私は深く考えないことにして、先程の疑問を口にする。
「入らないんですか？　立ってたみたいですけど」

「あー、いや、ちょっとね」
「早く着きすぎたから、散歩でもしようかって話してたの」
……なるほど、まだ喧嘩の途中なんだ。
隣を見れば、綸さんは耳に手を当ててなにやら大きな溜息をついた。
「言ってくる。香澄、二人のことよろしく」
せっかく良くなっていた機嫌もまた悪くなって、それでも綸さんは口の端でフフと笑った。一人先にコテージへと小走りにかけてゆく。
取り残された私たちはといえば、ポカーン、綸さんの行動力に驚かされて、立ち止まっていた。
「今、綸、戸山さんのこと名前で呼んだ!?」
いや、それは私だけだったらしい。二人は同時にそう言って、私の方を見詰めてきた。どうやら、綸さんが他人の名前を呼び捨てるのはとても珍しいことらしかった。とは言っても、メンバーのことは呼び捨てにしていた。
「何があったのさ!?」
「い、いや～。私にもさっぱり……」
私は具体的な、綸さんに初めて呼び捨てにされた夜のことを話した。勿論、綸さんの演奏のことは隠して。
「あ～、なるほどね。綸ってそういうとこあるから」
「波長が合っちゃったんだね」
波長が合う、のかどうかは分からないけれども、そう言われると嬉しい。だけど、二人が何言ってるのか良く分からない。そんな回答を頂いて首を捻っていると、
「音、だよ。
切っ掛けは多分、戸山さんの言った夜に二人で演奏した事だね。その時のギターの音で――何が伝わったのか分からないけど、――戸山さんの考えが綸に大体分かるようになっちゃったんだ。ギターじゃなくても、足音とか呻き声だとかで」
なんて言われたけど、でも、そんなこと本当にあるのかな?

音楽を通して気持ちが通じ合うってのは何となく分かるし、それの延長にある領域なんだってことも理解できるけど、でもそれ、本当に？

「嘘だって思うでしょ。でも、本当。

綸が分かってやってるのかどうかは分からない。けど、名前を呼ぶってのはそういうことなんだよ――」

良く分からないけれど、とにかく、私は綸さんと仲良くなった、ってことでいいらしい。

その後、喧嘩も収まったということで綸さんから連絡があり、無事合流出来た。（私は初めて知ったけど、）ラッパッパ《結成記念ライブ》らしい今回、同時に《解散ライブ》にもなるということで練習はみんな身が入っていた。アカリちゃん、アオイちゃんは合宿途中参加だったから、大丈夫かなと思ったけど、私の知らないところ――つまり合宿前――では結構合同練習していたそうだ。挨拶もそこそこに練習練習練習、で疲れたけど、まあ。その代わり得るものはあったと思う。やっぱりラッパッパの演奏が身近にあるというのが大きい。具体的な目標としての追加メンバー、アカリちゃんとアオイちゃんが加わったこともり、私のギターは結構成長した。それでも電気と比べれば苦手だし、今回のライブメンバーの中では頭一つ落ち込んでいる。それでも、ラッパッパは、綸さんは私に演奏して欲しいと言ってくれたから、私は本気で演奏をするだけだ。そうおもって残りも練習を頑張り、手指のテーピングは更に増えた。

ライブ当日、私は何とか、ギターソロも含めてミスなく乗り切ることが出来た。それだけじゃなく、合宿で一番脂の乗った演奏ができた気がする。新たなにやらかをつかんだ感触もあって、この解散ライブで、私は凄く成長できたと思う。

ライブ自体はそんなに大きなものでなかったのもあって、緊張もそこまでしなかった。記念日ということで、学校の中でのみ告知してい

たんだとか。それでも結構な人数が集まったけど。観客の中には吹奏楽部らしい集団が見え、その子達と桜さんたちがライブ前に親しそうに話をしていた。

「……本来なら、ここで終わり」

アンコールのエンディング曲も終わり、いざ終わりか、となった所で、綸ちゃんが突然、マイクを手に取って話し出す。出番も終わり袖で見守っていた私はビックリして、傍で見ていた共演者二人と顔を見合わせた。アカリちゃんもアオイちゃんも知らないらしい。

「トモ、アスカ、マナ――三人のために曲を演奏する。見世物でもなんでもなく、プライベートで」

そう言うと、綸ちゃんは満足したように楽器を構える。会場全体がハテナに包まれている中、桜さんが必死にフォローしていた。

そんな桜さんを綸ちゃんはちらりと見る。視線に気付いた桜さんは、その場で腰を捻って横を向いて、手を指揮者のように上げた。

１．２．３．４――。リズムを取り始める。それが三回ほど繰り返された後、軽やかな、それでいて厳かな神秘の音が会場を包み込み始める。もはや退室どころか、衣擦れの音を出すことも無かった。誰一人退席なんてしていない。入のタイミングをはかると、桜さんも指揮をやめてすぐに音を合わせていった。

悲しい気持ちになる曲だった。ただ、普通の曲じゃない。

悲しい気持ちを前提として、笑顔だとか感謝だとかを同時に伝えてくれる。まさに卒業ソングだった。

私はこの曲を聞いている途中、震えが止まらなかった。なにも演奏がすごかったからってわけじゃない。いいや、十分凄かったんだけど、Ｒｏｓｅｌｉａ並の演奏技術が霞んで見えるくらいに輝く、本当に凄いことは。この、袖から見る視線の先にいる二人の本当の凄さは――。

この合宿中のことが走馬灯みたいに私の頭に流れ始める。

車の中で作曲に悩んでいた綸ちゃん、練習の間の時間で五線譜に睨めっこしていた綸ちゃん、その後ろから奏で始める桜さん。

……でもそれは、とは別の曲だ。綸さんは新しい曲調に挑戦してい

る、と言っていた。今聞いている音は、どちらかといえば彼女たちがこれまで演奏していた曲の側だ。それに、綸さんに聞かせてもらった、途中までできたその曲は、今私が聞いている曲とは全く違う。

――今、オーディエンスの前にいるこの瞬間に、既存と比べても何ら遜色ない曲を作っている

私だって気まぐれにメロディを口ずさんで、ギターを鳴らすことはある。それでも、多少は珍しい事のようだ。でも、そんなの、所詮は遊びで、楽しいだけだ。本当に洗練された、――こんな言い方はあんまりしたくないけど、テープに捲ける曲かと聞かれれば、それは間違いなくＮＯだ。

アーティストの中には十～十五分程で即興の曲を作り上げてしまう人もいる。それなりのクオリティでできる人も、テレビ番組なんかで見た事がある。そう、十～十五分で、それなりのクオリティで曲を作れるなら、テレビに出られる。

そんなもの。そんなもの、世界中を探せば見つかるとばかり、私の心はそれ程に――

演奏は、既存曲よりも少し長い尺で行われた。前奏、Ａメロ、Ｂメロ、サビ、Ｃメロ、間奏……などなど、そんなものはないと言わんばかりの演奏は、しかし、その完成度は、結局退室するお客さんがいなかったことで証明できるだろう。

型破り、と言えばリスキーで一長一短なイメージがあるけど、彼女たちの演奏はそんなもんじゃなかった。型に嵌めず演奏する、それはつまり常に知らないメロディーで演奏するという事だ。そしてそれを、有無を言わせず納得させ、涙すら流させる彼女たちの力。

メインとなって常に新しいメロディーを綴った綸さん。メロディーに虹色の彩りと無二の個性を与えた桜さん。どちらか一人だけでも、そしてありふれた一曲だけでも、今回のステージを埋められた。私には、いや、今回のライブを聞いた人は全員、そう確信していた。

彼女たちの解散理由は結局そこだった。新曲『さよなら』が終わった時、時間を取って理由を話したんだ。

才能という領域すら飛び越えたその音楽に、吹奏楽部の中で一番に上手かった程度の自分たちでは隣に並び立てない、と。演奏技術ならまだしも、その表現力を、自分たちの音で希釈するのは罪だと。

ていうか、ぶっちゃけ辛い、と。

そう言っていた。

音楽でもなんでも、やっていてそういう気持ちになる子は結構いる。が、私はそれをいつも、どこか他人事のように考えていた。そういうこともあるんだな、程度に思っていた。あるいは、私だって勉強はしたくないし、とか。

でも、それは

私は今日ばかりはと思って、トイレで髪型を崩した。

七話

「あの、本気で吹いてもらってもいいですか」

いつものスタジオ練習の最中、モカの静止の声も聞かず、あたしは佐藤桜さん、大宮綸（いと）さんにつっかかった。ココ最近、二人の音は落ちている。自分のこともあるから黙っていたけど、もう限界だった。

「ガールズバンドパーティーはそこそこ大きなライブです。それなのに、直前になって解散してみたり、人員の補充もしなかったり、なんなんですか。音が濁るくらいなら、解散しない方が良かったんじゃないですか」

「蘭！　そんな言い方――」

「巴は黙ってて」

外野の声をシャットアウトしつつ、二人を見やる。さすがにバツが悪いのか、佐藤さんはいつもの笑顔を引き攣らせて、大宮さんの方を向いていた。逆に大宮さんはいつも通り、端正な顔を無表情に固定したままで何を考えいるのか良く分からない。感情を読もうにも、その長い黒髪の毛先一つ動かしやしない。

「二人で大丈夫って、驕ってるんじゃないんですか。正直、今のお二人の音に合わせることができません」

と、そんな挑発をしてみても、まるで暖簾に腕おしで、大宮さんの顔は位相をずらして存在しているかのように何も変わらなく見え、佐藤さんだって、笑いながら誤魔化すように謝罪の言葉を述べるだけで意味が無い。同じような言葉を再度吐きかけて見ても、結局同じ。あたしは更に苛立った。こっちは、あんたたちの背を見て頑張ってるってのに。

ちょっと前なら、こんなことは思わなかった。バンドっていうのは華道への反抗の証と、幼なじみを繋げるためのもの。だから、自分たちが好きなようにできれば良かった。それが、今はまわりにも音楽への本気を強要している。シンプルに、ポピパの――戸山香澄の――おかげだってことはない。幼馴染たちと音を刻んでいくうち、あたし自

身、音楽が好きになっていったのが八割だ。学校の音楽の授業もまともに受けるようになり、自分でも凄く勉強した。ギターを続けるために嫌っていた親とも話し合った。華道とも向き合った。花を見かけても、今は目をそらすことなく、『好きだ』と言える。

そんな経緯があるから、あたしは音楽に対してかなりうるさい方だと自分でも思う。幼馴染たちから見てもそう見えるらしく、ことライブやギターに関しては癇癪持ちのような扱いを受ける。

今まさに、癇癪玉が大きく破裂している所だった。

「そりゃ三年生だから、受験とかで忙しいのかも知れませんけど……。でも、自分で決めたライブも真剣に向き合えないようなら、ラッパッパも底が知れますね。悪いですけど、Ａｆｔｅｒ　ｇｌｏｗはそんな所で足踏みしてられません」

今、あたしはかなり酷いことを言ったと思う。でも、言わずにはいられなかった。練習の度に思っていた。ラッパッパの音が落ちている。回数を重ねる毎に酷くなるそれを今日こそ指摘しようと思っていたけど、いざ練習に来てみると音より前にまず『解散』――分裂？――を聞かされ、今までとは比べ物にならないくらい酷い音を聞かされた。腹が立つような音を。

もう十分我慢の限界だった。

「そっか。

――今日はちょっと調子が悪いみたいだから、悪いんだけど、これで帰るよ。次の練習までには何とかするからさ、ほんと、ごめんね」

二人はそれ以上に何も言わず、さっさと楽器を片付けて帰っていった。結局、二人の態度と表情は、ずっと変わらなかった。

「お二人共、そろそろ十分たちますよ」

氷川紗夜の呟きで、私は歌うのをやめた。

Ｒｏｓｅｌｉａのボーカルさんが言い出したこの勉強会には、私と桜の他にＲｏｓｅｌｉａの三年組――ドラム以外――がノートを広げている。ココ最近――連休が終わって一週間――、学校まで押しか

けてくる香澄やこころの影響なのか、私も幾らか活動的だった。燐子の誘いだった事もある。

そんな訳で、勉強会とは名ばかりなんだろうと呼び出されたカラオケボックスに向かった訳だが、これが結構本格的な雰囲気で、苦手な教科の課題をさんざ消化させられた私と桜はもう腕が動かないくらいには疲れ果てていた。まさか、普段から課題を交換して済ませているとは言えない。

「いい曲ね。なんの曲かしら」

「……『勉強疲れた』？」

「あはは、今作ったんだ……☆」

「十分間も演奏するとは思いませんでした」

カラオケボックスに入ってから二時間の間集中していたのだから、たかが十分くらい自由にさせて欲しいが。とは思いつつも、私はペンを取って先程思いついたフレーズを書き溜めてゆく。サビのところが特に良かった。もっと絶望的な表現を加えれば、上手いこと終末チックな世界を説明できる。新曲は人類の消えた世界で二人が踊っているイメージだ。世界観の説明を最初の方に組め込める。だとすれば、少し路線を変更してサビはダンスのみを押し出してみてはどうだろう。……いい感じだ、踊りに没頭している様子、相手しか見えない状況が上手いこと伝わるはずだ。

「いや～、集中力ないからかなり疲れちゃってね。ちょっと飲み物取ってくる」

私がペンを動かす最中にも桜はそう言ってコップを二つ持ってカラオケルームを離れる。ドリンクバーにいちごミルクはなかったので、次に飲むのはカルピスだろうか？　悪戯にカルピスソーダを注いでくる可能性も考慮しなくてはいけない。しゅわしゅわは苦手なので、その場合は桜のを頂こう。

と、書き留める私のノートをいつの間にか覗き込んでいた燐子が聞いてくる。

「あの……もしかして、コレ――」

「新曲」

「驚いたわ。作曲も同時にしていたの？」
「歌ってたらいい表現が出てきたから」
「へぇ、作曲ってそうやって進めていくんだ☆ていうか、ノートが五本線なのって、もしかしていつでも作曲できるように？」
　ベース担当の人の問いに、コクンと頷いて肯定の意を示す。普通のノートでも書けるっちゃかけるが、パッと見で曲が流れるのはどっちが早いかと聞かれればやはりこっち。完全に落書本意でノートを選んでいたのだった。
「悲しい曲ですね……」
「ディストピアね。ユートピア、つまり理想の世界とは逆の意味……聞くだけじゃかなり広い意味を持つけれど、この曲では、非文明的な退廃を表しているのね」
　コクリと頷く。同時に胸を撫で下ろす。良かった、ちゃんと伝わったようだ。
　私の曲は、誰かを泣かせる自信くらいは作曲家として持っているつもりだが、しかしその世界観を正確に言い当てられた経験は桜以外にない。さすがＲｏｓｅｌｉａ、本格派ガールズバンド、と、私は少し嬉しくなった。
「普段も、同じように……作曲しているんですか？」
「色々」
「色々、とは？」
「基本は適当に書いてるだけ」
　そしてその中から良い歌詞を抽出するのが、私のやり方だ。作曲の基本とかやり方だとかいうのは守らないことがほとんどだ。書きたいことを書きたい時に書いてたら溜まってて、曲の雰囲気に合わせて印象を変化させつつ断片を繋げていく。どこかの小説家のインタビューで似た手法を使ってた人を見た。その人は頭の中にある事をちょくちょく書いていくタイプで、私みたいに完全に作曲＝フレーズ溶接の形とは違う。私は、曲の中に物語を作るには自分自身物語を体験する必要があると思っている。自分の心の移り変わりを日記のように記していき、いつか自伝ともいえる曲が出来上がる。

ただ、この間の解散ライブみたいにガムシャラに作る時もあるけど。私はバンドにそこまで執着はなかったが、桜の方はバンドメンバーと仲良くやっていたから。

「なるほど……。私もたまに、そういう時……あります」

「へえ～★みんな、そうやって作曲してるんだ」

「分からない」

他の作曲者のことはどうでもいい。

「私もさ！　作曲とかやってみたいんだよね☆

綸がちょっと手解きしてくれたら嬉しいんだけどな～」

「……。

――いいけど」

「ですが、フリータイムは最短で3時間です。せめてそれまでは勉強しましょう」

「じゃあ、それが終わったら作曲の話ということでいいわね？」

「私も……色々、お話ききたいです……」

そういうことに纏まり、私はドアを開けるのに立ち上がった。桜は両手にコップを持っている。そろそろ帰ってきたと足音が教えてくれたからだ。私は存外耳がいいらしい。まさか、猫の動画を見ていた湊ユキナさんのイヤホンから漏れた猫の鳴き声を誰も聞いていないだろう。会話に紛れて、ということだろうが、湊さんも話の中で油断して音量を大きくしたらしい。

桜が待っているドアを開けながら、一人笑いを漏らした。

『――氷川紗夜です。今日は勉強会お疲れ様でした。誰かに何かを教えるというのは勉強の最適解で、とても有意義な時間だったと思います。――』

『――佐藤さんからもう聞いているかも知れませんが、改めて、ごめんなさい。今日は普通に勉強会をしましたが、元々の動機は違ったんです。――』

『――湊さんの発案で、今回の勉強会を企画しました。湊さんが言う

には、元を辿ればＡｔｅｒｇｌｏｗだそうです。――』

『――私も、Ｒｏｓｅｌｉａのメンバー達も、美竹さんと同じ気持ちです。Ｒｏｓｅｌｉａとしては今回はあえてだまっておこうという形で纏まっていましたが、美竹さんの意見で、湊さんの考えも変わったそうです。メンバー全員で話し合った結果、こういう形になりました。佐藤さんは最初から気付いていたようで、トイレに行く際に問い詰められた時には焦りました。佐藤さんは、あんな顔もするんですね。少し驚きました。――』

『――結局当初の目的は果たせませんでしたが、私としてはこれで良かったと思っています。音楽に関して、横からアレコレ言われるのが辛い、というのはＲｏｓｅｌｉａの中で一番分かっているつもりですから。――』

『――ただ、覚えておいていただきたいのは、私は今回の件に関して辞めた三人側の人間だということです。――』

『――三人を見れば見るほどよく似ていました。私の場合は妹で、音楽に限った話ではありませんが、しかし似ていると思いました。――』

『――自分にはできないことを当たり前にできる人と、常に比較されるというのは相手の想像より、ひょっとしたら本人の感じているよりずっと辛いのです。しかもその人が身近ならもっと。嫉妬、なんて一言で片付けていいものではありませんが、しかしそんな自分にすら嫌悪感を抱いてしまって、逃げ道が無くなるのです。

実は、私は三人とよく話していました。お互いに、何となく分かったのでしょうね、相談も受けました。脱退を唆したのも私です。申し訳ございません』

『私についてどうなろうと構いません。しかし、あの時三人は『二人の音楽が分からない』と言っていました。私も同じ印象です。どこか違う世界の音にすら聞こえる、耳から鼓膜が振動していることを忘れていくようなサウンド。私にはあなたたちがどうやって音を作っているのか分からない。もちろん、あの三人も。――』

『――こうも言っていました。『着いていけないし、着いていくのは死

んでしまう。着いていくのが勿体ないのもある』と。お二人共の音を一番に認めているからこそ、自分はその領域に立てないことをよく理解し、バンドメンバーとしての練習に体力と気力の底付くまで消耗し、そしてお二人の音を邪魔したくない、と――』

『――三人を辞めさせたのは私ですから、今更どんな罰をも恐れません。しかし、三人についてだけは、よく考えていただきたいのです。――』

連休が過ぎて、次の週末、日曜日に高山高校でのラッパッパのライブがあふる！私、丸山彩は大宮綸（いと）さんに誘われて、ここまで来たのだった。もともと、こっそり来る予定ではあったけど。

校内ライブの場合、学生証か専用のパスがあれば無料になる。あと、先生も無料だ。それ以外の場合、つまり外部の人は有料。チケットを買っての入場になる。つまり、私たちは本来なら有料なわけだ。持つべきものは友達、という訳で私は専用のパスを持っている。

「会場は体育館になりまーす。看板が出てますので、それに沿って進んでくださいね～」

入り口で受付にパスを渡し、入場する。今日はパスパレの練習がない日だ。他四人はそれぞれ個人のお仕事があって、私だけがこのライブにこられた。ちょっと優越感、なんて。もちろん、千聖ちゃんにしっかりとプロデュースして貰ったから――忙しい中ごめんね――、外から見ても私だと気付かないだろう。もしくは、プライベートだって思って近づいたりはしないはず。この歳になって、やっとその辺りの分別がついてきた。まあ、気付かれたいって気持ちはまだまだ捨てきれないけど。

さて、と待ち合わせの相手を探す。

「せんぱぁ～い、こっちですよぉ～！」

見慣れた髪型は探す前に見つかった。パスと引替えに渡されるリストバンドの優先席制度を使って、一番前に陣取っている。彼女、香澄ちゃんもまた、綸さんにパスを渡された一人。その横には、薫さん、

こころちゃん、燐子ちゃんもいる。日菜ちゃんと一緒になってなんだか怪しいことをしていた四人だ。私はリストバンドを強調するようにスマホを弄るふりをしつつ最前席まで歩き、座った。

隣には香澄ちゃん、順に、薫さん、こころちゃん、燐子ちゃんだ。

「開始十分前か。ちょっと遅れちゃったかな？」

「そんなことないです、全然！　私たちも今来たところで！」

「ふふ、私たちがここに着いたら、桜が迎えてくれてね。最前列まで案内してくれた、というわけさ。一足遅かったね」

へぇ、そりゃ凄い。私もあと五分早く家を出ていればなぁ。でも、それも仕方ないか。休日のアイドルは布団から離れ難いものなんだ。

「でも、なんで私まで呼ばれたんだろう？」

「そんなの、彩がいた方が楽しいからに決まっているわ！」

「……たしか、丸山さんも綸さんに誘われたんでしたよね？」

「うん、そうだけど」

分からない。確かに私と綸ちゃんは仲良しだけど、それでもこの間やっと名前で呼び合う程度だ。お互い忙しいっていうのもあるけど、四人のように特別仲がいいってわけじゃないし……。

「そんなのどうでもいいじゃない！　それだけあなたのことが好きなんだわ！」

「そう、ですね……。……私も、そういうことなんだと思います」

「うん、私もそう思う！」

チョロい私はこころちゃんが少し励ましてくれるだけでえへへと照れてしまう。

こんなだからＳＮＳでチョロ山とか頭フワフワピンクとか言われちゃうんだ。まあ、それは治らないし直せない。千聖ちゃんも『そのままでいいのよ』って言ってたし、その必要も無いだろう。誘われた理由の謎を含め丸ごと忘れておくことにする。

「パスパレの方は私以外予定が入ってたんだけど、みんなは？」

「はぐみは今日はソフトボールの試合なの！　美咲は家の方で用事があるみたいなの」

「――そして花音は、イルカショーを見てくると言っていたよ」
「ポピパは今日は休み！　えっと……有咲はお店の方に出てて、おたえはバイト、りみりんはパン屋巡りで、紗綾はパン焼いてた」
「……Ｒｏｓｅｌｉａは、今日も練習です。私だけ、無理を言って……」
　皆がそれぞれのバンドの予定を教えてくれた。Ｒｏｓｅｌｉａはやっぱり厳しいな。でも、あの燐子ちゃんが練習を放り出してまで来たがるようなアーティストがラッパッパなんだ。ユキナちゃんもそれを許すってことは認めてるってことだよね。久々のオフくらい家でゆっくりしたかったけど、やっぱりライブにきて正解かも！
「へ～、そうなんだ！　私は今日は一日オフなんだ！　折角だし、ライブ、見ていこうかなって！　初めてなんだ！」
「そうなんですか？　ふふふ、私、こないだ一緒に演奏したんですよ～」
「えっ、いいな～。なんで私呼んでくれなかったの！」
「だって、彩先輩ずっと忙しかったじゃないですか……」
「そりゃそうだけどさ……」
　若干の悔しさも感じつつ、会場を見回す。他の学校の体育館って、なんだか新鮮だ。私は内部生だから中学と高校が違わないのも影響しているかもしれない。わ、なんか変な棒ハシゴが壁に貼りついてる。何あれ……？
「アレ？　ドラムセットとアンプがあるって事は、普通に軽音楽でやるのかな？」
「彼女らはずっと、私たちと練習していて、ギターコードを覚える暇すらなかったと思うが……」
「ＤＪブースがないってことはミッシェルの出てくる可能性はなしね！」
「音の数的に、笛二本よりはマシってことじゃないかな」
　なんて、議論しているうちに会場に開始のアナウンスがなされる。気付けばいつの間にか入り口の扉は閉まっていて、あとは演者を待つだけの状態だった。

八話

ステージの両脇から、二人の女の子――佐藤桜さんと大宮綸（いとさん――が登場した。

――!!

さすがにこの状況には、沈黙者で有名なファンたちも黙る訳には行かなかったようだ。ドラムセットとアンプの置かれたステージに抱いていた大きな疑問の解消と同時、それらは大きなどよめきへと変わった。わたしは好きだった雰囲気が壊されていくのを感じつつも、一緒になって喉を動かさずにはいられなかった。まさか、本当にそうなんて。

「凄いわ燐子！　燐子の予想が当たったわ！」

「燐子ちゃん、なんで分かったの!?」

「たまたまです……」

弦巻さんと丸山さんには悪いけど、今回は本当にたまたまだった。まさか、本当に二人で、初めての楽器に挑戦するとは思わなかった。

「大きいギターだね」

「ああ。彼女――綸の華奢な体のせいだろうね。アンバランスでとても……儚い」

さすがギタリストなのか、瀬田さんと戸山さんの二人が目を丸くして驚いているのはその編成よりも人物だった。ギターを担いでいるのが大宮さんで、ドラムが佐藤さん。確かに、印象で見れば逆のイメージだ。大宮さんはどちらもやらない気がするけど、どちらかと言えばドラムな感じがするかもしれない。ドラムを叩きながら歌うことが難しいからだ。大宮さんは、声で歌うのを避けている気がするから。

そんな、意識もしていないような予想は今まさに打ち砕かれていた。

ギターコードを足元のアンプに繋ぐ大宮さん。頭を軽く振って、腰までである黒髪を払う。触覚のようなシンメトリーなもみあげが踊った。防護用なのか細身のヘッドホンを装着している。やや小柄な体

躯に骨から細いのだろう腕と脚。そこまで重くないであろうという程度に膨らんだ胸部は、華奢な体を見るとやや心配にもなる。つまり、そこそこ大きい。肩からかけた無骨なギターはシンプルなデザイン。色は青。それも暗い青だ。深い海の、星空の色。そういえば、殆ど黒に近いギターに星のようなものがあしらってある。この辺りはデザインの領域だから、弾きやすければいいのだろうけど。あこちゃんなら悲鳴をあげて踊り出しそうなデザインだ、と思った。名前は『ナイト・ザ・ナインティン・ナイティ・ナイツ――星の夜の騎士――』。

そんな、ギターの背景のように映る黒髪の女性の目の前にはマイクスタンドがポツリと置いてある。女性の白い手の指に動かされ、角度と高さを常に変えていた。

「あー、あー、ＯＫ？　そろそろ、始めますか？」

――いぇーい。

どうやらＭＣは佐藤さんのようで、マイク越しの声にファンたちが控えめに答えている。ロックをやるのは初めてだけど、意外と観客の雰囲気はいい。

「――じゃ、まずは一曲聞いてください」

独特なリズムのドラムで曲は始まる。あこちゃんは『かっこいい』とコメントするだろう。わたしは、それに相槌を打てるかは分からない。佐藤さん独特のリズム、佐藤さんの個性が、私は分からない。ともすれば、ひょっとして苦手にすら感じる。佐藤さんの音楽が、波長が、どこか本質的に《合わない》。

大宮さんの性格なのか、どこか控えめにギターが参加した。佐藤さんのドラムがメインだと言わんばかり、ドラムを一番に格好よく魅せようと演奏しているのがわかる。大宮さんの音は分かるので、ギターが加わることでやっと曲が掴めてきた気がした。

デビュー曲、『愛の告白』、だと思う。予測不可能だとかそんな言葉すら出てこない、何も分からないドラムと初めて付いた歌詞のせいも

あって分かりづらいけど。最早別の曲だった。
彼女たちは新曲を作るとある程度の間はその新曲をライブで演奏するが、そこから気持ちが離れると二度と演奏しなくなる。それは彼女たちの思いをリアルタイムに綴った曲だからだろう。過去の自分が分からなくなった時、曲を弾けなくなるんだと思う。天才的な面もあれば、不器用な面もある。そんなわけで、過去の曲を歌うとすればアレンジくらいでしかできないんだと、わたしは確信する。別の曲レベルまで改変しなければ、気持ちが籠らないのだと。

――あなたが欲しいだけ、好きと言いたい――

初めて聞いた、大宮さんの歌声。彼女は結局、カラオケでだって歌わなかったのだ。いや、彼女にとって、歌うことは演奏することなんだと思う。だから、今のギターと歌を両立させる状態はとても新鮮だ。口が二つあって、二重にでも歌う感覚なのだろうか？　それとも、口側に演奏の意識があるんだろうか？
どうにせよ、どちらの音からか痛いほどに感情が伝わる。ギターはあんまり上手くないのに、なんでだろうか。余裕が無さげに、常に目線を落として歌っている。そんな状態だろうと、彼女の演奏は変わらなかった。音で会話すら出来そうなレベルにあるその表現力は楽器によらないものなんだと、わたしは理解する。
「――あんまり上手くないね」
一曲が終わる。《儚い》ラブソングのうちの一つ目。相手の隙間を埋めようとする、一途な女の子の歌。歌詞とイメージに少しだけギャップがあった。
佐藤さんが再びマイクを持つ。
「どーも。『愛の告白』アレンジバージョンでした」
ここで佐藤さんのＭＣが入る。話のテンポに合わせてドラムを叩いている。
ドカドカっと、タン・タン・タン――。独特のリズムで叩く。当たり前だけど、あこちゃんのドラムと全く違う。大宮さん以外に誰も

合わせられない、誰も理解できないリズム。リズムという既存概念すら壊してしまう音。わたしの耳は震え、足までも震えが伝染した。

怖い。

「他の三人は、この前解散したんです。ホームページやＳＮＳでも見たと思うけどね。――まあ、といっても、この前決まったばっかりでまだドタバタしてるんで、続報を待っていて欲しいってとこですかね」

――ダダダダダダ、ジャーン！　ダンダンダダン！

「えー、次のお知らせは楽器についてかな。これは、実は他のバンドの影響で。

ガールズバンドパーティーっていうイベントに今度お邪魔するんですが、そのメンバーと一緒にやってるうちに、影響されちゃってね。こういうのもいいかな、って思ったのがきっかけです。

今までのアタシたちは、『誰かを笑顔にする』だとか、『お客様の為に頑張る』だとか、『みんなで頑張る』だとか……そういう音楽をする理由っていうのが欠如してたんです。ただ、好きだからやってる状態で。音楽をやりたいって目標をもう一度掲げる必要があるって勉強しました」

「それと、私たちは二人でやってる訳じゃないってこと。いや、もしかしたら、二人の間ですら何かしらの気遣いがあって、音楽を弱めていたかもしれない。

――そんなの、音楽じゃないよね。音楽っていうのは、個性と個性のぶつかり合い。馴れ合いじゃないの。相手に合わせるものじゃないんだって、教えて貰いました。解散を機会に、一度見つめ直してみようってこの前二人で話しました。一人一人が好き勝手やって、合わないようならこのまま解散でいい。アタシたちの音楽はそうなんだなって思います」

「聞いていて下さい。次の一曲、アタシたちの未来が決まります」

～♪

二曲目が流れる。大宮さんの細い声が、雄弁に語り出す。予測でき

ないメロディーがギターから溢れてくる。
なるほど、と私は思った。
歌詞は、つまり大宮さんは『0と1だけなんてつまらない』と歌っている。だけど、大宮さんのギターはそうじゃない。緩急のハッキリした音色はそれ自体がリズムを作っていて、『こんなことができるんだ』と教えている。骨の髄まで響くような深い音はこんなに楽しいこともあるんだよ、と伝えてくる。

――周りを見ていなかった、力の限り走り続けてた、あの日の自分――

確かに、二人の演奏は素晴らしい。この世に二つとない、教科書に残るどころじゃないくらいの衝撃を私たちに与える。

――気付いたら、二人ぼっち。それでもいいの。だけど、なにか足りないものを探すんだ――

だけど、二人だ。楽器が二つなら音域は限られるし、音質もまた同様。音の厚みでさえ二つ以上にはなれない。

――♪

――果てのない道の途中、貴方は隣にいて、歩幅を合わせてた――

なるほど、と、わたしはこの頃になると、おおよその二人の歌を理解していた。今の二人の演奏心境までも、曲から全て読み取れた。曲に感情を込めることにおいては他の追随だなんて考える必要のない世界に生きる大宮さんがギターだからこそ、そしてその力を遺憾無く発揮してくれているからこそ、わたしはそれを読み取っていた。

――合わせなくていいんだよ。違っていいんだよ。隣に居るから。抱きしめているから――

お互いを意識しすぎたのだろう。今思えば、彼女たちの曲は、どこか丸みがあった。集団としては尖っていたけれど、全体として丸く結束していた。

それはリーダーである佐藤さんが顕著だ。今、わたしが聞いている、恐怖すら覚えるようなリズムは初めてだからだ。佐藤さんは常に大宮さんを意識して、自然にリズムをセーブしていたんだろう。大宮さんがついてこれないとかそんな心配ではなくて、ただ《合わせようと》して。

大宮さんだってそうだ。彼女たちの曲は全て彼女が書いたものだが、それらは例外なく大宮さんから佐藤へ向けた感情を歌った曲。遠回しな愛情表現は本人の望むものではなかったということ。

――大好きだから――

そしてこれは、それらと決別する曲になる。

曲と歌詞の両方向からストレートに告げられる愛と、一見メチャメチャなドラムリズム。本能のままに動いている……気付けば曲調もだいぶ変わっている。

叩いている本人も、弾いている本人も何をしているのかよく分かってないはずだ。支離滅裂、順序だてて話してなんかいない。一見整った歌詞の裏で、曲とドラムは暴走の域を超えている。もはや誰にもわからない。聞いてはいけない音を聞いている気分だ。いや、実際にそうなんだろうと思う。

――愛しているから――

歌詞が終わり、後奏に入った。ふと俯いていた顔を見上げてみれば、ギターはドラムに向かい合って演奏している。周りを見れば全員、立ち上がってピョンピョンと飛び跳ねていた。

すぅ、はぁ

大きく深呼吸をする。もう、人混み酔いだなんて気にならないくらい、曲に取り憑かれていた。

胸の奥に灯る熱に従って、私も一気に飛び跳ねる――！